

渦紋の季節



清松吾郎

目次

第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章
三五	二八	二三	一六	八	四

渦紋の季節

第一章

一

神楽坂は狭い坂道である。道の両側には喫茶店、パチンコ店、写真館など様々な店が一キロほど連なる。この道路には、地元の人たちから密かに、『角栄道路』と呼ばれる別名がある。昭和四七年の後半から、四九年末まで日本国の総理を勤めた田中角栄が、ときどき出入りする別宅があつて、午前、彼が国会に出るために一方通行とし、午後は一般車の交通にあてるため、逆転一方通行としたものである。

坂を登つてゆくと左手に、朱塗りの門構えを持つ善国寺が目に入る。門を潜り少し進むと十五段の石段があり、その上にやはり朱塗りの柱に囲まれた本堂がある。その中に江戸時代から神楽坂の『毘沙門様』として信仰を集めた、『毘沙門天』が鎮座している。

善国寺の向かい側に広がる一帯は、神楽坂の老舗料亭街であり、賑やかな表通りとは対照的に迷路のように石畳が広がり、昼間は静寂につつまれている。

その中の一画に、料亭『山ふさ』がある。一応料亭と名乗ってはいるが、七十五歳になる女将の梅子が持病の座骨神経痛が悪化し、立ち居振る舞いも不自由になっている。

まともな営業もおぼつかなくなり、一、二階合わせて六部屋の建物が、現在では待ち合の形式で、辛うじて暖簾を保っていた。

『山ふさ』には、お手伝いの中年女性が二人いて、身動きも不自由な布袋様のよな梅子の世話をやきながら、時折ある宴会を、女将に代わって切り盛りしていた。宴会といつても、料理はすべて仕出しで、侍る芸者は暇を持って余している売れ残りばかりだったが、それでも安い費用で済む、この店の座敷を接待に使う客もいて、月に四、五組の客はある。

しかしこの程度の宴会から上がるピンハネでは、店を維持できる筈もなく、ここところ階下の二部屋を麻雀部屋にして、麻雀好きな客を物色しては引きこみ、売上の足しにしていた。

二

香山武司は、建築資材の販売会社を始めて五年目になるが、このところようやく売上が安定し始め、一息つけるようになっていた。

ある日、アルミ製品の原材料を提供してくれる、東名アルミの部長から、一度神楽坂で飲みたいと謎をかけられ、安くあがると聞いていた『山ふさ』を選んだ。

得意先の五人と、担当の社員を連れて、一人三万円の予算で花見をかねての宴会となったが、予算の割りには料理も普通で、年配だが芸者も二人つき、一応は三味線の音色も聴くことが出来て、それまで座敷遊びには経験のなかった一同は、まずまず満足していた。宴会が終わって、客と社員を帰したあと、支払いのために残った香山に、帳場にでんと構えた女将が、

「社長さん、麻雀はおやりになるのですか？」

長身で筋肉質な、男っぽい風貌の香山に、媚びるような目を向けた。

「ええ好きですよ、たまに付き合ひ麻雀はしておりますが、何か？」

香山は、突然麻雀の話が出たので、なんのためだろうかと戸惑った。他に趣味はないが麻雀だけは、学生時代から親しんでいる。いや親しむどころか一時は、それで生活をたてていたことすらある。アルバイトで麻雀荘にメンバーとして勤め、毎日必死で負けられない真剣勝負に、明け暮れていたこともあった。

「いまね、常連さんが一人欠けて困っているのです、誰か来るまでおつき合ひして頂けると、有り難いんですがね」

なんとしてもという目つきだった。

「もう八時になるし、そんなに遅くまではつき合えませんが。それにレートは幾らでやっているのですか？」

「いえ、遊びですよ、千点二百円ですもの」

「じゃあ、交替がくるまで」

女将の言葉に、ほろ酔い機嫌の香山は、ちよつとだけ遊んでみようという気分になった。

「悪いわねえ、お客さんを引き止めたりして。でも社長さんとはこれからもおつき合ひ願いたいわ」

布袋様のような女将にウインクされ、首筋がザワついたが、案内にきた仲居のあとについて麻雀部屋に向かった。

部屋は切り炬燵風になっていて、麻雀台がセットされており、三人の男が所在なさそうに煙草をふかしていた。最近では麻雀台も自動化のものが、ぼつぼつ出はじめているが、この部屋では、まだのようであった。

「まあこの煙……、空気を入れ替えましょう」

仲居がガラス戸を開け放つてから、香山を紹介した。三人はこの部屋の常連で、こここの近所でスナックを経営する玉木と、会社員だという大沢に中田と名乗った。

香山は、はじめての顔合わせだし、今夜は勝つことよりも、なるべく負けたくない麻雀に徹しようと考えていた。財布には二十万円は残っている筈だ。こここのレートなら別に心配することもあるまい。

ルールを打ち合わせ、点棒を確認してからゲームがはじまった。はじめてのメンバーなので、完全伏せ牌にして洗牌をした。詰め込みなどのインチキを防ぐためである。出だしの東風戦で、香山は西家だったが親がまわってきたとき、配牌を見て驚いた。四暗刻のリャンシャンテンが揃っている。思わず三人の相手を眺めた。でも積み込み崩れではなさそうだ。

三まわり目に、九索とパイパンのシャンポン待ちとなった。双方とも生牌である。ダマテンで待っていると、それから二巡目に九索をツモった。劈頭の役満は効果的だった。

そのあともツキまくり、結局三人がハコテン近くなり、二回戦目も余裕からか際どいパイがすべて通り、追いかかりリーチをかけては和了るので、三人はすっかり萎縮してしまった。

三回戦目も三人が、これまでの負け分を取り戻そうと、総握りを要求してきたのを、負けて元々と快く引き受けたのが、またしても大勝してしまい、とうとう四回、朝の四時までつき合う羽目になってしまった。

四回戦目の終盤に、常連客が一人入ってきたので交替して貰い、

「今日は午前中に来客があるので、どうしても出社しなければ……」
お茶代を余分に差し出し引き上げたのだが、麻雀の勝ち金で『山ふさ』に宴会で支払った金額の、大半を回収してしまった。

三

「社長、お電話ですよ」

事務員の上野芳子から声をかけられ、昼食後の休憩時間に、応接室のソファに凭れて新聞を読んでいた香山が、目の前の受話器を取り上げると、神楽坂の『山ふさ』からだった。

かけてきたのは女将で、

「社長さん、いつぞやは有り難うございました。お帰りになったあと、皆が悔しがって大変でしたよ。五月の連休中再三お電話したのですが、連絡が取れず残念だったわ」

「ああ、それは済みません。ゴールデンウィーク中事務所は休みなので、失礼しました」

「今夜ね、うちでは珍しく女性のお客さんが二人見えるので、社長さんに是非麻雀のお相手をして頂ければと思って、お電話したのですが」

「何時からですか？」

「六時から予定しているのですが」

「わかりました。お伺いさせて頂きます」

電話から聞こえる女将の声は、実際の姿からは想像もつかないような、なまめかしいものだった。

香山はいつか『山ふさ』で、宴会のあと、麻雀に誘われて大勝したので、一度はつき合う必要があると考えていた。

香山が六時少し前に『山ふさ』に着くと、

「もう皆さん、お待ち兼ねですよ」

愛想笑いを浮かべて、仲居が迎えに出た。女将と挨拶を交わしてから麻雀部屋に入ると、スナックのマスター玉木と、女性が二人待っていた。

「いらっしやい、お待ちしておりました、今噂をしていたところなんですよ。あときのツキには恐れ入りました、こちらが噂の香山社長さんです」

玉木が、色白で目の大きな、派手な顔立ちの中年女性と、細面で淑やかそうに見える同じような年頃の二人に紹介した。目の大きな女性が、

「黒川です、こちらは田村さんとおっしゃいます、お手柔らかに」

好意の籠った目を香山に向けた。田村という女性も黙って頭を下げた。仲居がお茶を運んできて、四隅の茶托に置いて退室していった。

「さあ、それじゃ早速はじめましょうか、今夜は敵討ちさせてもらわなげりゃ」

玉木がいそいそとサイコロを取り出して、親ぎめの準備をした。女性がいるため和氣藹々とした雰囲気、ゲームが開始された。

洗牌をするとき、黒川と名乗る女性の指に、眩いばかりのダイヤが目立った。四五カラットはありそうな大きさと、香山は思わず目を奪われた。

「千点二百円の麻雀ですから、香山さん握りましょうよ」

黒川が右手の人差し指を一本あげて、香山に言った。

「結構ですよ、何事も仰せのとおりに致します」

香山も冗談めいた口調で言った。

「それとも皆さん、やり難かったら総握りにしますか？」

黒川の言葉に、他の二人は首を横に振って乗らなかつた。

東局は、お互いの手の内を探り合うような打ち方で、あまり大きな和了^{かがり}はなかつたが、南局で西家の香山が親になると、いつかのときと同じような状況で、配牌が四暗刻の三シャンテンだった。

四巡目に七索と二萬のシャンポン待ちになったが、七索は二枚、場に出ているので、残りは二萬の二枚だった。香山は五萬を一巡目に捨てているので、リーチをかけた。

途端に北家の黒川が、一発で二萬を振りこんできた。

「その牌、ロン」

香山が、静かに手牌を倒した。

「えっ、どうして？…… 心臓に響くじゃないの」

黒川が驚いたような声をあげた。裏ドラを確認すると二筒^{びど}で、手のうちで三筒が暗刻になっていた。リーチ一発、三暗刻、対々、ドラ三枚、場の二翻で親の倍満だった。

「社長、どうなってるの？ こないだもツモリ四暗刻をやって……。同じ手がつくなんて信じられないな……」

玉木の解説に黒川が、

「もしかしたら、積み込みでもなさったのかしら……」

冗談めいた口調で合わせた。

連チャンは香山がノーテンで流れ、ラス親は黒川だったが、香山がタンヤオの一翻で軽くあがり、終局となった。

半荘ごとの精算になっているので、トップの香山がマイナスの黒川と玉木から、賭け金を受け取った後、黒川が、

「はい、握りの分」

と言いながら、一万円札を差し出した。

「あつ、細かいの無いんだけど」

香山は人差し指一本が、千円だと思っていた。

「細かいのって、どうするの？」

黒川が怪訝な顔をしたので、あとの言葉を飲みこんだ。香山は黒川の経済力を臆

げに察するとともに、もしこの回負けていたら、とんでもない恥をかくところだったと思つた。

結局この夜は半荘を四回戦い、十二時すぎに終了したが、トータルで今夜も香山の一人勝ちだった。

「二度あることは三度あるって言うから、もう一度つきそうね、来週の土曜日あたりいかが？」

黒川が香山に誘いをかけた。

「結構です、おつき合ひさせて下さい」

今夜も大勝ちした以上、逃げるわけにもいかなかった。

「日曜日なんだから、このまま続けませんか？」

玉木が言うと、黒川が、

「いえ、やめるときはきっぱり切り上げましょうよ。健康にも良くないし……」

厳しい口調で言われて、玉木も苦笑するほかなかった。

呼んで貰ったタクシーに、玉木を除く三人が乗りこむと、

「純子さん、もう帰らなくてはいけないのでしょうか？」

黒川が田村に訊いた。

「今夜はうちのも上海亭で、マスターたちと徹マンなのよ。これからどこかにゆくのか？」

「ええ、よかつたら赤坂に面白い店があるので、つき合わない？ 香山さんもいかがですか？」

「お供させて頂きます」

香山は覚悟した。懐具合は今夜の勝ち金を合わせても三十万少々だったが、不足だったら名刺を預けて、あとから振り込めばよい。

四

香山は現在の商売にとりかかる以前、目黒にある防衛庁の技術研究所に勤めていて、特殊な勤務に従事していた。技術研究といっても香山が担当する部門は、BF研究室という戦闘時における格闘技を研究する機関だった。

旧ソ連にも各国の格闘技を研究し、分類整理をして、新しい格闘技体系をつくりあげ、『サンボ』と命名したものがあつた。その『サンボ』を軍隊用にアレンジしたものが、コマンド・サンボである。香山が所属するチームも、日本の柔剣道、相撲、

合気道などを総合的に分析研究して、最強の戦闘格闘技を作り出すべく、肉体と頭脳をしばっていた。

香山は特に中国拳法の流れを引く、大成拳を専門に追及していて、一流の使い手になっていたが、全国に分散する陸、海、空の各部隊への出張が多く、一年を通じて家に落ち着く暇がなかった。

五年間一緒に官舎暮らしをしていた妻は、そのことで不満を抱くようになり、三歳になる娘を連れて世田谷の実家に戻ってしまった。暫くするうちに人を介して、性格の不一致ということで離婚の要求があり、香山の説得も頑として拒み続け、やむを得ず離婚届けに捺印して別れた。

その後香山はある事件に巻きこまれ、マスコミに騒ぎ立てられたのが原因で、退職する羽目になったが、防衛庁関連の事業に再就職することは禁止されていたので、知人の経営する建築資材の会社で、懸命に営業を覚え、その後独立して日本橋に会社をつくり、現在に至るまで、ただひたすら事業を安定した軌道に乗せるべく、全力投球を続けてきた。

赤坂の『みすじ通り』の、ほぼ中間地点の路地を入ったビルの二階に、深夜スナック『紅ばら』がある。会員制らしく約三十坪の店内は、すっきりしたインテリアで、ママが以前プロのシャンソン歌手だったとのことで、客の唄に合わせてピアノ演奏をするのと、自ら唄うシャンソンが評判だった。四人いるホステスたちも、それぞれに清楚な容姿で、独特な品格を醸し出している。

金曜日の深夜が一番混むそうだが、今夜も客席の大半が埋まっていた。この店では黒川紀美子を上客だということが、ママやホステスの態度でわかった。

麻雀をしていたときは、陰気に感じられた田村純子も、飲む程に明るくなり、紀美子と無意識のうちに華やかさを競い合う雰囲気だった。

「それはそうと香山さん、奥さんは？」

紀美子が訊いた。

「僕は独身です」

「まあ、最初からですか？」

「いえバツ一です」

「あら、悪いことをお聞きしたみたいね、もうよしましようこんなお話」

そのとき純子が、

ないと仲間割れの元ですから……」

いたずらそうな目で見つめた。突然の難問に汗ばむようにして口籠っている香山に、二人は大笑いした。そしてなお一層親近感を深めた様子だった。

この夜、紀美子が唄った『ラ、メール』と、純子の歌謡曲は、唄い慣れているらしく抵抗なく聴けた。そのあとせがまれて香山が英語で唄った、『枯れ葉』に紀美子たちやママも驚いたが、客席からも大拍手がわき、リクエストの声がかかった。

香山は、以前防衛庁の付属機関に勤務していたとき、日常的に英語を必要とする職場だったので、英会話はお手の物だった。それにシャンソンは好きで、住まいにも何枚かのCDがあつて、たまに聴きながら夜の無聊を慰めることがあつた。

第二章

一

黒川紀美子には、小さな息子を抱えた信子というパツ一の妹がいて、歌舞伎町でクラブ勤めをしている。離婚の大きな原因が、結婚後も姉離れが出来なくて、何かという姉と亭主を比較し、主婦としての自覚に乏しく、息子が生まれたあともいさかいが絶えなかった。信子は離婚すれば、今の様な趣味嗜好い生活よりも、また姉と一緒に面白おかしい人生が送れると錯覚して、あっさり家を出て紀美子の許に身を寄せたものだった。

そのうちに紀美子から、子供のためにも自力で生きる努力をしろと意見され、一人息子を施設に預けて、ホステス暮らしをはじめた。信子の勤めた店は、歌舞伎町の区役所裏にあるクラブ『城塞』という、歌手出身のマスターがギターを手にして行う、エンターテインメントが評判で、結構各界の著名人が集まる店だった。

勤めはじめた頃は、水商売の経験がないので、何人かの先輩ホステスから雑用まで押しつけられる状態だったが、十人並みの容姿に半年もすると客がつきはじめ、いっぱしのホステスとして振る舞うようになっていた。

従業員には口煩いマスターが、信子にだけは気を遣うので、自然に他の従業員たちも一目置くようになっていた。それも紀美子が週に一度は店を訪れ、雰囲気を整り上げるので、マスターにとつて信子は、なくてはならない存在だった。

今夜も黒川紀美子は、社員の徳田浩二を連れて、大蔵省出身の大物政治家の秘書と、会社の管轄を担当する税務署員を接待するため、神楽坂の料亭を経由して、『城塞』を訪れていた。

時間は十時を回っていたが、ちょうどマスターのシヨウタイムがあり、一番賑やかな時間帯だった。紀美子が四人で席につくと、彼女の姿を見た有名歌手のアーノルド小池が、挨拶に近づいて来た。

「黒川さん、お世話になってます、先月は有り難うございました」

「あら、今夜はお仕事？」

「マスターと打ち合わせがあったんですが、終わったので独りで飲んでいたところです」

「それなら、こちらに移ってこられたら？ ねえ皆さん宜しいでしょ？」
客たちにも異存はなかった。現役の有名歌手と同席する機会など、滅多にあることではない。

そのうち、ワンマンショーが終盤になったとき、ステージの上からマスターが、「今夜は皆さんご存知の、アーノルド小池さんが見えております。一曲歌って頂きましょうよ、皆さんの拍手でお願いして下さい」

客席から一斉に大拍手が沸き上がった。アーノルド小池は、今夜この店で歌う予定はなかったが、成り行き上応じないわけにはいかなかった。まして日頃鼻屑にして貰っている黒川がいては、断れなかった。

ステージ上がった彼はマスターのギターを借り受けて、

「自分ではないので、トチツたらお許し下さい……。それでは突然のご指名で準備不足ですが、ご来店のお客様とお店のご繁栄のために。それにお見えになっている黒川さんのために……」

ギターに乗せての弾き語りから、自分のスタンダードナンバーをはじめた。さすが売れっ子の現役歌手、たちまち店内はラテンの甘い旋律に包まれていった。臨時のステージを勤めた小池の席には、あちこちから差し入れがあり、卓上が大賑わいになって、紀美子の招待客は、思いがけない余興に大変なご満悦だった。

小池は女房や女友達のために、紀美子の店で宝石類を特に安くわけて貰っていて、最近赤坂ホテルで行われたディナーシヨウでは、紀美子のグループで大量のチケットをさばいて貰い、その上記念にと、大粒のダイヤをあしらった、タイピンとカフスの三点セットをプレゼントされていた。

二

この夜お開きのあと、代議士秘書はハイヤーで送り出した。税務署員は徳田と何か打ち合わせしていたが、徳田が運転してきた会社の車で送ることになった。

徳田はアルコールを一滴も口にしていなかった。

「気をつけて、お送りして頂戴……」

紀美子の言葉で、税務署員を乗せて出発した。独り暮らしで中野に住んでいる紀美子が、自宅のマンションに戻ったのは、午前三時を回っていたが、玄関を開けて部屋に入るといきなり電話が鳴った。こんな時間にと驚いて受話器をあげると、赤坂警察からのものだった。

「黒川さんですか？ お宅の社員さんが車の事故で入院されたのですが、鞆の中に黒川さんの名刺がありましたので、連絡しました」

「えっ、事故？ 誰なんですか？」

「徳田さんですが」

「まあっ……、帰宅が遅くなって済みませんでした。すぐこれから病院にお伺いします」

警察の説明では、安全地帯に衝突した自損事故だというが、酔いも一瞬にして覚めてしまい、身支度もそこそこに再び表に飛び出した。

タクシーを拾って、教わった日大飯田橋病院の、救急外科病棟に駆けつけた。徳田は幸い命に別条はなさそうだったが、顔面は打撲のため包帯で覆われていて、肋骨が三本折れているとのことだった。紀美子は徳田の躰もだが、事故のとき招待客が居なかったのか心配した。看護婦に訊いたが、担ぎ込まれてきたのは徳田一人だと言った。

麻酔で眠っている徳田に訊くことも出来ず、待合室でウトウトしているうちに夜が明けた。担当医に徳田の容体について尋ねてみると、

「二日ぐらいすれば、口をきくことが出来るようになると思いますが、もう一度頭の検査をします……」

重傷ではなさそうなので、ホッとしたが、状況を確認するにしても、もう少し待たなければと、一旦会社に出ることにした。

社員に知らせると騒ぎになったが、紀美子の制止で一応は治まった。十時になり出勤してきた曾根村社長に報告すると、一瞬顔色を変えたが、

「専務に任せるので、宜しく頼むよ……」

早々に、紀美子に下駄を預けてしまった。

紀美子が管轄の税務署に、それとなく電話をしてみたが、

「今日は急用でお休みです」

との返事だった。赤坂警察からまた紀美子に電話があり、

「事故車の座席にアルコールの匂いが残っていて、徳田の血液からもアルコールが検出されたので、回復次第事情聴取したい……」

と言ってきた。苛立つ気持ちを抑えながら一日を過ごした紀美子が、翌日正午に徳田の病室に入ると、彼の意識は回復していた。ベッドに近寄り手をとると、

「専務済みません、とんだことになって」

蚊のなくような声で徳田が言った。

「心配しないで寝てなさい、それよりお客さんは？」

「それなんです、衝突して意識が遠くなりかけたとき、『俺はいなかったことにしてくれ』という声が聞こえたのは覚えているのですが……」

「わかったわ、警察に訊かれても貴方一人だったと言うのよ、あとは私が責任持つから」

「わかりました、必ずそうします」

ここまで喋るのがやっとの様子だった。紀美子は税務署員も怪我をしているだろうに、どうしているのだろう、きつと業者の車に同乗していたのが、表沙汰になるのを恐れて、必死で逃げ出したのだろうと、状況を想像して肌寒くなった。

徳田が回復したあと、事故のときの状況を訊くと、『城塞』を出たあと客の要請で、もう一軒寄ってからの帰り道だったらしく、徳田もホステスに勧められて、つい一杯飲んだらしかった。

三

曾根村商会は、銀座四丁目の裏通りに面する、永楽ビルの一階にある。約八十坪のスペースで貴金属や宝石の展示販売コーナーが五十坪、奥にある事務所と収納庫が三十坪、この種の店としての営業成績では、銀座でも上位を占めている。

昔、黒川紀美子が中野で喫茶店を開業しているところへ、近所でアパート住まいをしている曾根村辰夫が、毎朝モーニングサービスを食べに通っていたが、本当はママの紀美子が目当てだった。

曾根村は水戸市に妻子がいたが、宝石屋のカバンセールスで、得意先が東京都内を中心としているため、中野にアパートを借りていて、土曜日になると妻子の待つ水戸市に帰るとい生活だった。

旧制中学を卒業してすぐに、御徒町の宝石店に就職し、約二十年もかけて宝石業のノウハウを身につけ、結婚して暫くすると、いつまでも安月給で働いては、うだつが上がらないと、カバンセールスに転じたものだった。

得意先が増えるに従って、無店舗販売に限界を感じ、小さくても自分の店を構えたいと焦っていた。紀美子が独身であることを知った曾根村は、このあまり流行っていない店を、喫茶店半分、貴金属宝石類の展示販売を半分設ければ、必ず儲かるようになる顔と顔を合わせる度に紀美子を口説いた。

紀美子は二十代の半ばに、弘前で結婚して娘を一人産んだが、姑とことごとく対

立する日常に嫌気がさし、娘を婚家先に残して東京に出てきたのだが、中野にある知人の喫茶店主が老齢のため、経営を代行してくれないかと頼まれ、それならいっそのこと店を譲り受けようと、実家の援助を受け、居抜で引き継いだものだった。

以前からちよつとした手数料や、コーヒーの炒れ方はよく褒められ、自分でも自信があったが、商売となるとそう安易なものではなかった。

そんな頃、曾根村から商売替えの熱心な誘いがあり、喫茶店で客を待ち受けるという消極的な立場より、進んで顧客を開拓できる宝石商に魅力を感じはじめ、ある日曾根村に、

「いいわ、貴方の商売一緒に手伝わせて。但しこの場所ではじめるのではなくて、いっそのこと、御徒町に出ましようよ……」

連日のように曾根村から、宝石業界についての説明を受けていたので、おおよその見当はついていていた。

「でも、御徒町でいきなり店を持つのは大変だよ。金もかかるし」

御徒町で店をはじめるとなると、一般ユーザーに対しての販売に加えて、仲間うちの中間卸しにまで手を伸ばさないと、やっていけないと考えたが、確かに地の利はある。

「ここで、この辺のお客さん相手に、ちまちまとした商売をやるつもりなら、私は乗らないわ。御徒町に店舗を出すのに幾ら必要か、考えたことあるの？」

「うん、去年も卸元との間にそんな話があつてね、いつまでもカバン屋やつてないで、店を持ってよって言われたことがあるんだ」

「そのときお金の話は出なかったの？」

「出たよ、ちょうど良い空き店があるって言ってくれたんだけど、なにしろ展示品も含めて二千万円もかかるって言うんで、まだとでもって断つたよ」

紀美子は、喫茶店が造作権譲渡の契約になっているので、居抜きで譲渡して一千万円、預金が約四百万円あるので、どうしても二千万円なければならぬのか、曾根村から聞いた横山商会に出かけることにした。

その結果、アメヤ横丁と山手線を挟んだ反対側にある、宝石店街の中に、一階で間口二間の約十坪ばかりの店を借り受け、横山商会に保証金を納めて商品を陳列し、曾根村商会として発足した。

宝石業は不動産業などと違い、高価な商品がカバンひとつで移動するので、儲けも大きいリスクもある。

商品にはA物とB物があつて、A物というのは仕入れ先がはっきりしていて、経

理上も正規の商品として登録され、売買の際には領収書がきちんと発行される。

B物は正規の帳簿には記載されていない、非合法なもので、いわゆる脱税商品である。例えば或る宝石商が倒産した場合など、手持ちの宝石類がB物として、正規の帳簿から姿を消す場合がある。

商品の中味は、A物もB物も変わりがないので、それ向けのユーザーを掴まえば、扱う業者の利益も大きい。そんな業界だけに、税務署も監視の目が厳しく、商売の裏側ではいかに抜け穴を作ろうかとする動きが盛んだった。

御徒町に店を持つA宝石店は、店主と従業員二名の、中間卸しを主体とする店だったが、店番の女の子が病気で入院し、代わりの女の子をアルバイトで雇った。

採用を決めるとき、少しノロイ方かなと店主は考えたが、可愛い子だったし、給与条件も安く折り合つたので雇い入れ、接客態度を徹底して教えこんだ。

ある日この店員が一人で店にいるとき、立ち寄った税務署員が、展示販売で必要なので、店主が戻ったらダイヤをいくつか用意しておいてくれと、以前から取引がある振りをしてカマをかけるのと、

「わかりました。A伝の方ですか？ B伝の方だったでしょうか」

いわずもがなの言葉の口に出した。ピンときた税務署員が、

「きまっているだろう、B物だよ……」

言い残して帰り、翌日この店にガサをかけた。そしてB物をあらかた押さえられた店は手終した。

またある日、御徒町のB宝石細工業者に税務署の査察があつた。ここにもいくつかのB物があつたが、中でも最高級の原石である、三十二キャラットのスターサファイアで、星形の光芒を放つ最高級の原石である。ほぼ円形の、ビー玉を一回り大きくしたような外見で、価格も装飾をして仕上げれば、三千万円以上になる品物だった。

税務署員が、重箱の隅をほじくるように、店の中を引っ掻き回しているとき、その品物が転がり出した。それを見た店主が奥に向かって幼い息子の名を呼んだ。

「おーい、こんなところに、こないだ探していたビー玉があつたぞ……」

息子が奥から出て来て、それを拾った税務署員から手渡され、ポケットに入れて奥に引っ込んだ。

税務署員も商品として仕上がった物なら、見逃すことはなかったろうが、原石などは馴染みがないので、うっかりしたものらしい。ともかくこんな話が日常茶飯事な世界である。

御徒町に開業して五年。曾根村商会は社長の手堅い商法で信用が増し、紀美子が営業の表舞台で水を得た魚のような活躍を見せて、仲間の業者も驚くような販売実績が上がった。

卸元の業者は紀美子の如才なさに、競って有利な条件で品物を回してくれ、紀美子は販売先の開拓で、多少でもあるコネは徹底的に利用した。

業者に対する中間卸しは、社長の曾根村の仕事だったが、地方業者の中には専務の紀美子を指名する声が多く、飛行機嫌いの曾根村に代わって出張する機会が増え、縁が幾つあっても足りない程だった。

開業七年目になったとき、隣接の洋品店が移転したので、約二十坪のその店を借り店を広げた。この頃になると若い男性の営業社員四名、経理事務の男女二名、女子店員が三名と総勢十一名の会社に膨らんでいた。

仕入れは三ヶ月サイドの約束手形で、販売は現金主義だったので、顧客さえ開拓すれば利益はうなぎ登りだった。

商売が順調に発展していた年の秋、B物の扱いが多く、業者仲間でもとかくの噂が絶えなかった、金村商事の社長が脳溢血で急死した。曾根村はこの韓国籍の男と仲が良く、紀美子の反対を押し切って、商品を約束手形で卸売していた。

金村が急死したとき、手形による未回収の金額は五千万円に達していた。曾根村は十日後に迫った手形の決済を、金村の女房に確認したが、女房は手形の件については全然話を聞いてなかったらしく、銀行の預金残金も殆ど無いと泣くばかりであった。曾根村は遂方に暮れ、紀美子に相談した。

驚いた紀美子が、

「あれほど止めなさいと反対したのに……」

曾根村をなじったが、内輪もめしている場合ではないので、早速金村の女房と会い、女同志でじっくりと話し合った。

その結果、現金は残っていないが、ダイヤがあるので処分する相談に乗ってくれないかと頼まれ、品物を見ると、『よくもこんなに集めたものだ』と感心する程の良質なダイヤが多数含まれていて、金額で推定すると四億円を超える価値があった。

女房に経理の帳簿を見せて貰ったが、いい加減なもので、これらの品物は記載されていなかった。

この女房は金村のところに、韓国から後妻として嫁いできて五年目で、商売のこととは一切知らされてなく、子供もないので、ダイヤを処分して韓国に帰りたいたいことだった。

普通、韓国人同志は結束力が強く、こんな場合皆が駆けつけて面倒を見るのだが、生前変わり者だった金村は、韓国人を嫌って信用せず、女房にも交流させなかったもので、誰も顔を出さず、女房は紀美子を頼りにする他なかった。

「このダイヤ、どのくらいの価値があるか、奥さん知ってます？」

紀美子が尋ねると、

「わたし、宝石の値段わかりません、たけと主人かいつもこの袋見せて、この中は一億円のダイヤが入っていると云いました」

金村は恐らく、金額を正直に言わず抑えた金額を告げていたのだろう。

「そんな金額じゃないわよ、恐らく二億円にはなる筈だわ。うちの手形の分差し引いても奥さんには、一億五千万円は残る筈だわ」

「ええーっ、そんなにあるのですか……。でもこのことは誰にも言わないでください」

紀美子にとっても渡りに船だった。

早速会社に戻り、曾根村と相談して、取引銀行から五千万円を借り入れ、その他の預金残額から五千万円を掻き集め、店頭の商品を担保に街金融から、月三分の利子で五千万円借り出して、金村の女房にB物のダイヤと引き換えに渡した。

金村の手形決済の金は、何粒かのダイヤを特別価格で得意先に卸すことで、なんなく調達することが出来た。

このとき金村の葬儀から女房の帰国まで、一切の面倒を見た曾根村は、その後韓国人社会からも信義に厚い男として信用され、仕事が益々やり易くなった。

紀美子はこれらのダイヤを半分加工し、処分すると二億六千万円になった。銀行と街金融にそれぞれ返済して、加工費を支払っても一億五千万円近く残り、預金残高が更に殖えた。残りのB物は、会社にある専用の隠し場所に保管した。

五

新しい年が明けて、各官庁の業務が通常の動きをはじめた頃、東京国税局に通の投書があった。差出人は『正義の士』とだけ書かれてあり、内容は『御徒町にある貴金属商、曾根村商会が無登録の商品を隠して、脱税を行っている』という

チクリだった。

国税の査察は、密告からはじまることが多い。早速内偵すると、この会社がこのところ、凄いい勢いで成長していることがわかった。急成長の陰にはB物の匂いがある。確たる証拠はないが、ガサをかけて現物を押さえてしまえば、あとはすべてゲロするだろうと方針が決まった。

この間、周辺の業界に聞きこみ調査をしたが、日本人業者の中には、曾根村商会の急成長ぶりをやっかむ者も多く、根も葉もないことを調査員に告げ口する者がいたが、不思議なことに韓国人業者からは、一切批判めいた話が出ず、調査員はもしかしたら曾根村は、韓国系じゃないかと勘ぐっていた。

十一月の下旬、この日は朝から小雨がパラつく、底冷えのする日だった。午前九時に黒川専務をはじめ十数名の社員が、朝礼を行うつもりでショールームの中央に集まったとき、表のドアを蹴破るようにして五、六人の男が乱入し、あつげにとられている社員たちに、「そのまま、そのまま……」

手で制しながら声をかけ、中でも一際躰の大きな男が、胸から手帳を取り出し、「東京国税局です。これから査察を行いますので、皆さんはそのまま静かに自分の席に着いて、次の指示をお待ち下さい」

言いながら紀美子に向かい、

「貴女が責任者ですね？ これから机の中と収納庫は全部見せて頂きます」

有無を言わせぬ口調だった。咄嗟に紀美子は事務員の原島洋子に向かって、

「洋ちゃん、全部お見せしなさい。だけど女性ロッカーの中の下着と生理用品は、見苦しいからすぐ片づけなさい」

原島洋子に目配せした。

「わかりました」

洋子はすぐ隣接の部屋に入り、ロッカーの中にある、B物が入っている包みを紙袋に入れて、その上にパンティや生理用品を押し込んで、税務署員の目の前で自分の机の上に紙袋を置いた。直ちに調査が開始された。

そのとき紀美子が、

「この子生理が不順で、先程急にはじまったというので、寮に帰って着替えをするところだったのですが、宜しいでしょうか？」

指揮を取っている男に訊くと、

「ああそうですか、結構です。本日は女性職員が同行していませんので、生理用品まで検査するわけにはいかない、信用しましょう」

頷いて洋子が袋を持って出てゆくの見送った。

洋子は店を出ると袋を胸にしっかり抱いて、真っ直ぐに上野駅に向かった。社長の曾根村が、水戸から上野着十時の電車で、出勤してくるのを知っていたからである。

十時が過ぎた頃、曾根村が階段を降りてきて、そこに洋子が青い顔で立っているのに気づき、

「どうした……、何かあったのか？」

と訊いたので、洋子が状況を報告すると途端に顔色が変わり、膝頭が震えだした。そして洋子が差し出した、B物のダイヤが詰まった袋を受け取ると、あたふたとそのまま水戸に引き返していった。洋子は持つてきた、下着の詰まった紙袋を抱えて再び店に戻った。国税の調査はたけなわだった。

「ご苦労さん、女って仕方のないものね」

紀美子が調査官に聞こえるように言った。紀美子が動揺も見せず毅然としているので、社員たちも安心した表情になっていた。

調査官たちが、丸一日かけて徹底調査をしたが、目当てのブツは出てこなかった。但し押収した帳簿の中に、不審な点がいくつもあった。

不満足な成果ではあったが、とにかく関係書類をタンボールに詰めて引きあげた。

こんなことは常にある、空振りを気兼ねしたり、相手の思惑に囚われていたのでは、査察官は勤まらない。

証拠が出ようが出まいが、疑わしい企業には警告の意味を含めて、一度ガサをかけておいた方が、今後のためになる。そしてそのような行為が許されるのが権力だった。

国税局は押収した帳簿類をチェックして、不審な箇所を究明するため、曾根村社長に頭を命じたが、曾根村が体調を崩して入院したため、専務の黒川紀美子呼び出した。

紀美子は国税局に呼ばれて、取調室に入ると、中年の調査官が一人いて、建物や周辺の雰囲気とはそぐわない粗末な机の中に、安物の椅子に腰掛け、紀美子にも勧めた。

紀美子は椅子に腰を下ろし、持参してきた手提げの中から小型のポットを出し、上蓋に中味を注いで飲むとしたところ、

「ちょっと待って下さい、それは飲まないで下さい。すぐお茶を用意しますから」慌てたように取りあげた。

「どうしてですか？ 私は健康管理のため、いつもこれを持ち歩いて、他の飲み物は口にしないようにしているのですが」

紀美子がムツとして抗議した。

「いや、以前ここで毒物による不祥事がありましたので、取り調べ中は、持ち込みの飲食物を禁止されております」

調査官が弱り顔で説明した。

約三十分程経過すると、調書を記述していた係官が、やたらに煙草をふかしはじめた。きつと物を書くときの習慣なのだろう。紀美子は煙草を喫わなかった。狭い部屋はたちまち煙りで充満した。紀美子は咳きこみながら係官に、

「済みません、私は喘息持ちなので、医者から煙草の煙りには注意するように言われておりますので……」

弱々しげな口調で言った。

この部屋には、小さな明り取りの窓が一つあるだけで、換気が悪く、一旦取り調べを中断して、入り口のドアを開け放ち、煙を出し終わってから、再び取り調べがはじまった。

三十分もすると、今度は係官のペンを持つ手が震えはじめ、そして思考が纏まらないうちに、右手の拳で額を叩いていた。そのうち「ちょっと失礼……」

そそくさと部屋を出てゆき、暫くして戻ったが、ニコチンの匂いが紀美子の鼻をついた。

そんな状況が一日中つづき、一応終了したとき、土気色になっていたのは係官の方だった。

紀美子も疲れ果ててはいたが、会社の台所に影響のある、B物を隠せた安堵感で、精神的には余裕があった。

そして帳簿上の問題点についても、不慣れな事務員のミスによるものと、どこまでも突っ張る紀美子の言い分に、曾根村商会对する追及は不発に終わった。

紀美子は、会社を大きくするためには、このようなことは再三あるものと覚悟し、今後は関係筋への根回しを、益々強める必要があると考えていた。

六

戦後最長と言われた、『いざなぎ景気』の大量消費の時代は、昭和四十年の半ばで終わり、一転して円の変動相場制を導入することにより、日本経済は高度成長期から安定期へと移行した。

そして昭和四十八年、それまで安定成長していた日本経済を、オイルショックが襲った。このとき銀座四丁目で高級毛皮を専門に扱う、池内商店が倒産した。曾根村商店は半年前から池内商店と取引があり、約一千万円の売掛があった。

毛皮だけの商いでは効率が悪いので、従来からの顧客に宝石類を追販することで、収益を増やしたいというのが、取引をはじめた口実だった。池内商店は取引がはじまった頃はもう既に、資金繰りがどうにもならなくなっていたらしい。

曾根村商会在池内商店と知り合うきっかけは、専務の紀美子が地方都市で展示販売を進めていたとき、たまたま何か所かで一緒になり、宝石と毛皮という共通地のある商品で、相乗効果を狙って客集めをしたことになった。

責任を感じた紀美子は、債権者たちと相談して了解をとりつけ、曾根村商会在池内商店の店舗を、継続して借り受ける交渉をした。勿論、事前に曾根村の同意を得たことだが、池内商店は八十坪の店舗に対して、二千万円の保証金で契約しており、家賃の月額百万円が六ヶ月滞納していて、その上家主から一千万円の借金があった。

滞納している家賃六百万円を、曾根村商会在が肩代わりすることで、紀美子は家主と話をつけ、家主もその他の条件なしで入居に応じた。なにしろオイル・ショックの直後なので、後釜の入居者が見つかりそうにない世相であった。

曾根村商会在にすれば、売掛になっている宝石類の原価は、ダイヤ以外の色石が大半だったので、総額で五百万円くらいの商品だった。表面金額は、一千万円の不渡りに加えて、六百万円の家賃の肩代わりで、合計一千万円の損害だったが、経理上損金で落とすことが出来る。

商品は原価では経費を加算しても、一千万円くらいなもので、入居の保証金を二千万円支払うよりずっと安上がりだった。

銀座に店を構えたことで、紀美子の営業にも益々拍車がかかった。もうこの頃では四人の若手営業社員も、いっぱしの宝石セールスマンとして育てていた。

本店での商いは、社員たちが頑張っているので順調だった。紀美子は地方都市における、移動展示販売に、一層力を注ぎはじめ売上は更に伸びた。公共施設を利用しての宣伝販売で会場費も安く、ユーザーに対しての直売なので利益は大きかった。

以前、金村商事から手に入れた、B物のダイヤも加工して販売し、この分だけでも三億円を上回る売上になり、紀美子は経理担当の洋子と打ち合わせをして、慎重に利益処分を行った。

昭和四十九年の夏、アメリカのニクソン大統領が、ウォーターゲート事件で引責辞任したのが、世界的な話題を呼んだ頃、宝石業界で移動展示販売を専門に手掛けて急成長していた、日本橋にある『ジュエリー松山』の松山仁社長から、四国、高松で大々的な展示販売を計画しているの、参加願いたいとの要請が、曾根村を通じて紀美子にあった。

紀美子は従来から、移動販売は自分のアイデアで行っていたので、共同開催を渋ったが、松山が曾根村の飲み友達だという事情もあり、断り切れず承諾した。

松山は三田大学の経済学部出身で、四十半ばの紳士然とした男で、女性の顧客には人気があり、急激に業績を伸ばしたが、反面女性にだらしないという評判もあり、銀座の社交界でも浮いた噂が絶えなかった。

展示販売では大々的な宣伝で、客を集めることからはじめるが、集まった客が目を奪われるような演出も必要で、一社の手持ち商品では限界があり、そのためにも松山は何かの有力業者に声をかけて、良い商品を沢山展示出来るように計画を立てていた。

会場となった高松市のホテル・ワールドは、市内でも一流のホテルで、宣伝が行き届いたらしく夏の暑さにもかかわらず盛況だった。参加した会社は、曾根村商会の他二社だったが、それぞれがとっておきの良質な品物を展示して、『日本橋ジュエリー松山』の名目で展示し、紀美子が連れてきた男性社員の徳田と、女子店員の下妻亮子を展示場に就かせ、自分は即売出来なかった客を追客すべく、遊軍に回って待機した。

三日間に亘る販売で、価格の安い商品は即売したが、高価な商品は予約して後刻再度の商談で条件を詰めることにしており、予約件数もかなりの数にのぼった。

最終日の夜、打ち上げの会が松山社長を中心にして、ホテルの一室で開かれた。松山は上機嫌で協力業者に謝意を述べたあと、

「お預かりの商品は、明日清算金と一緒にお返しします。予約分については予約客の都合を確認の上、どのように処理するかご相談させて頂きたいと思ひます」

紀美子も即売分の売上では、原価は回収できても、利益は諸経費とほとんどだろうと踏んでいたが、予約客の分については期待し、予約客全部のリストが欲しかった。

「松山社長さん、予約客のリストはお見せ頂けるのでしょうか」

「ええ、共同事業ですから当然です。明日コピーして差し上げます」

意外にすんなりと返事が返ってきた。

「ささ、今夜はゆっくり飲んで下さい。一応の成果はあったし、後始末は私どもがきっちりしますから安心して下さい……」

会食の後、ホテルのバーにおいての二次会で、紀美子も久し振りにリラックスし、社員の徳田や亮子と賑やかな一刻を過ごした。

翌朝六時頃、ぐっすり寝入っていた紀美子の部屋の電話が、けたたましく鳴った。すぐには目が開かなかったが、何度もしつこく呼ぶので、紀美子が酔いの残る目で受話器をあげると、フロントからの電話で、

「大変です！ 松山様の部屋で事件がありました。早朝から大変申し訳ございませんが、警察の方が見えていますので、お立ち会い願えませんか……」

いきなりの話なので、紀美子は何事だろうと、暫くは頭が混乱していた。化粧もそこそこに服装を整えてロビーに出ると、同業者全員が集まっていた。玄関先には、赤色灯が点滅しているパトカーが三台も停っていて、物々しい雰囲気だった。

「一体何があったの？」

近くにいた徳田に気づいたので、声をかけると、

「専務、大変なことが起きました。松山社長が強盗に襲われて、品物を全部盗られたそうです」

亮子が傍で震えていた。そのとき刑事らしい男が、

「黒川さんですね、詳しい説明は警察でします。その前に夕べは何時に休まれたか、外出はされなかったかお聞きしたいのですが」

紀美子に訊ねた。

「私は昨夜十一時に、ホテルのバーから部屋に戻り、酔っていたのでそのまま寝てしまいました。何か？」

「いえ、参考のためです。またのちほど警察で詳しく事情をお聞きしたいと思いますので、本日は指示のあるまで、このホテルを出ないで下さい」

紀美子は会社の商品が、原価で一億円もの金額になるので、そちらの方が心配だった。

松山はこの夜、酔ってぐっすり寝入っているところへ、二人組の強盗が押し入り、手足を縛られた上猿轡をかまされ、部屋にあった展示品をすべて持ち去られたことだった。

幸い怪我はなく、熟睡していたところを頭から袋を被せられたので、相手の顔は確認しておらず、ただ気配で二人組と感じたらしい。この日一日中、関係者は交替で高松警察に向き事情を聞かれたが、紀美子や他の業者に対する警察の態度は、参考人というよりも、容疑者に対する追及のような感じだった。

松山社長が、酔って部屋の鍵を忘れられたとはいえ、部屋の中に高価な品物があるのを知っていたのは、同業者だけだからである。

一通りの事情聴取が終えた翌日、関係者は高松空港から羽田に向けて飛び立った。機内では羽田に着くまで重苦しい雰囲気、お互いに口をきく者もなく、それぞれが疑心暗鬼に囚われていた。

この高松での共同展示販売に出発する前、紀美子はいつものように損害保険をかけて、保全をはかろうとした。そのとき曾根村から待ったがかかり、

「保険は主催のジュエリー松山が、纏めてかけるそうだ。主催者側が掛け金を負担すると言ってるんだから、単独では必要ない」

紀美子も、また曾根村がつまらないところでケチったなと思ったが、どうせ二重にかけても意味のないことなので従った。

東京に戻ってから、その後一ヶ月のうちに二度も高松署に、参考人として呼び出された。その都度、交通費と宿泊費は最低額を支給されたが、この間、地方での展示販売がストップし、そちらの損害が痛かった。

この件に関しては、保険会社も調査のため動いたが、被害者たちは一日も早い保険会社からの救済を待ち望んでいた。

三ヶ月くらい経過したとき、松山ジュエリーの社長が突然逮捕された。この事件の真相は、松山ジュエリーが数年に亘る放漫経営で、身動きがとれなくなり、一か八かの起死回生を賭けて仕組んだ、狂言強盗だったことが判明した。

共犯の社員が、約束の分け前が少ないので松山を脅迫したところ、半死半生の目に遭い、高松署の厳しい追及に抵抗する気持ちが失せ、自供したものであった。

松山は、商品は本当に紛失してしまったので、その言い訳のために狂言を仕組んだもので、商品の行方については一切わからないと、頑として口を割らなかった。

共犯の社員も、隠し場所については知らされていなかったらしく、その後の捜査でも遂に商品は見つからず、松山は懲役七年の実刑を科せられて入獄した。

この結果で保険会社は、契約者による自作自演の犯罪であり、一切の補償も出来ないとのことで、結局全員の泣き寝入りとなった。曾根村商会でも社長が、社員の徳田に向かって、

「出張販売は、もう少し注意して商品管理をしなけりゃ駄目だよ……」

紀美子にあてつけのように言ったのに対して、

「大体、あんないい加減な業者と契約したのは、社長じゃないですか、自分のことを棚にあげて社員を責めるなんて、どうかと思うわ」

紀美子に面と向かってなじられた。

曾根村はその場では反論しなかったが、社内には気まずい空気が漂い、社長と専務の間も目だってギクシヤクシはじめた。

この頃、曾根村が紀美子に内緒で、水戸の妻子のために豪邸を新築しているのが、彼女の耳に入り、尚更二人の仲は急速に冷えていった。

競走馬の生産牧場では、夜になつてもゆつくり眠る暇などない。特に毎年二月の後半から六月の半ば頃までは、猫の手も借りたい程の忙しさになる。十一ヶ月の妊娠期間を経て、繁殖牝馬の出産が迫ると、夜通し見守っていなければならないからである。

徹夜の見張り番、出産、少しだけの仮眠、再び種付けを終えて、他の出産間近の馬の管理、サラブレッド生産牧場の経営者は、余程タフな人間でないと勤まらない。

佐川哲夫は札幌の郊外にある、父親が経営する牧場の一人息子として育ったが、地元の高校を卒業してからは、勉強嫌いなため大学にも進まず、牧場の跡継ぎとしての自覚もないまま、ずるずると気儘な生き方を送っていた。

父親も哲夫が三十歳で結婚するまでは、一人前の牧場主として成長するよう、口やかましく追っていたが、子供が出来てもその性格は一向に改まらず、子供だけはつづけて生まれたので、

「あいつは、種馬の気分でのじゃなからうか……」

呆れた口振り、後継者としての期待を諦めてしまった。

哲夫に比べ、嫁の博子がかかり者で、家事を義母に任せて、自分は男衆に混じって馬の世話に明け暮れ、牧場の従業員も博子を頼りにし、日常の仕事は義父と博子を中心にして回転していた。

博子の実家も、やはり競走馬の生産牧場で、姉一人弟二人の家庭に次女として生まれ、幼少の頃から両親の厳しい躾を受けて成長した。

経済的にも余裕のない、小さな牧場であったため、働くことには慣れていて、経済観念もしっかりしていた。高校を卒業して間もなく、哲夫の両親に見初められて佐川牧場に嫁いできた。

牧場の跡継ぎの妻として、夫のために懸命に尽くしてきたが、十年すぎてみて、夫に多数の従業員を統率する、頭領としての資質が全くないことに気づき、なんとしても息子と娘のために、佐川牧場の後継者としての道筋を残したいと、必死で頑張っていた。

今夜は組合に葬儀があり、仕事を早仕舞して義父母が出かけたので、久しぶりで二人の子供に、自分の手で夕飯の支度をしてやれた。まだ小学生の二人から、学校での出来事などを聞いてやりながら食事を済ませ、明日の朝が早いので、早めに寢床に入った。哲夫は朝のうちから家を空けていて、まだ帰っていないかった。

朝早くから夜遅くまで懸命に働いても、儲けが薄く安定性のない家業に愛想をつかして、牧場の跡継ぎなど、考えただけでもゾツとする思いでいる哲夫は、このところ連日札幌市内にある麻雀荘に入り浸っていた。

天性のものなのか、賭け事には抜群の才能があるようだった。特に麻雀は強かった。楽しみながら金を稼げるこのゲームに、哲夫は首まではまりこんでいた。

今夜も一人勝ちして、大分懐が暖かくなった。夜中の十一時を回った頃、メンツの一人がオケラになりお開きになったので、近くのおでん屋で一杯ひっかけ、ほろ酔い気分で軽自動車を運転し家に戻った。

朝の早い家族はもう全員が眠りこんでいる。足音を忍ばせた哲夫が、夫婦の寢室になつている二階の部屋に入ると、布団から白い太股をはみ出させた博子が、しどけない寝姿を見せていた。

このところ暫く、女にありついてない哲夫はムラムラとして、ズボンもブリーフも脱ぎ捨て、博子のパンティを引き下げると、物も言わずにのしかかった。

いきなり眠りを妨害された博子が、仰天して無我夢中のうちに哲夫を突き飛ばした。日頃労働で鍛えている博子の力は強かった。突き飛ばされた哲夫は、下半身の硬直したものを床に打ち付け、ギャーッ……と叫んで失神した。

寝ぼけ眼の博子が夫であることに気づき、慌てて揺さぶったが、口から泡を吹いたまま正気に戻らず、そのうちに呼吸まで切迫してきた。驚いた博子が部屋を飛び出し、階下にある電話で救急車の手配をした。

家中の人間が目覚まし、大騒ぎになつていよううちに救急車が到着した。誰も何事が起きたのかわからず、右往左往して、哲夫は下半身むき出しのまま病院に運ばれた。

救急治療室で哲夫は、下半身の強度の打撲という診断を受け、手当ての結果間もなく回復したが、暫くの間ゴム管を通したまま用を足していた。

この話はアツという間に、近在の噂となつて広がり、哲夫ばかりか家族の者まで、暫くの間恥ずかしい思いをし、子供たちも冷やかされるので、登校拒否になつてしまった。

札幌の狸小路にある、小料理屋『かわだ』は、母親と一人娘が店に出ている。知り合いの博勞に誘われて、その店で飲んだ哲夫は、娘の純子に一目でのぼせあがった。

娘といっても、純子はもう四十歳に近かったが、哲夫には三十歳そこそこにしから見えなかつた。はじめて訪れた日から半年間は、雪の積もる季節にもかかわらず、連日のように通い詰めた。

最初の頃、佐川牧場のドラ息子……、あいつのムスコは怪我のため、くの字に曲がっているそうだ……、さまざま陰口を耳にした純子は、まともに取り合わなかつたが、いつとはなく情にほだされ始めた様子だつた。そのうち、たまに店が暇なときなど、二人して他の店を飲み歩く姿が目撃されるようになった。

哲夫はなんとしても純子をモノにしたいと、麻雀で稼いで、せつせと『かわだ』に注ぎこんでいた。

二

サラブレッドが、競走馬としてデビューする迄には、三回くらいの転機がある。一歳の秋頃に『子別れ』といって、母馬から強引に離される。

二歳の秋になると、生産牧場から競走馬としての教育のため、育成牧場に移される。そしてこの期間が過ぎると、トレーニングセンターの厩舎に入つて、レースに備える。

これが大まかな競走馬の辿るコースだが、他にも地方競馬への道もある。哲夫は自分の持ち馬として、一歳馬を三頭抱えていた。

通常子馬が産まれると、有名馬の種の場合は、いち早く大物馬主が出産前にツバをつける場合が多く、その他の子馬でも早い者勝ちの商談が普通だつた。サラブレッドは競馬場で走つて、結果を出したときに評価が決まるので、売買の決済に手間取る場合もあり、昔はブローカーに騙される牧場主が多かつた。

そしてサラブレッドは、簡単に売れるものではなかつた。折角育てても競馬場の厩舎に入れるルートがないと、競走馬としてデビューすることが出来ない。

哲夫は自分で育てるからと、良馬の血筋を引く一頭と、佐川牧場で独自に産ませた二頭を、自分の馬として抱えていた。これも馬の出産に立ち会いはしたが、あとの面倒は殆ど女房に任せていた。

二月の後半から佐川牧場は、最も忙しい季節に突入する。毎年のことであるが、一年中暇のない生産牧場が、特に厳しい労働を強いられる時期だつた。

生産牧場の朝は早い。六時に朝食の時間となるが、家族の食事は哲夫の母親がつくり、従業員の食事は博子が準備した。その頃は哲夫と子供二人はまだ寝ていて、七時半になると三人が起き出して朝食となるが、博子は牧場に出て働いているので、哲夫の母親が息子と孫二人の面倒を見ていた。

哲夫は、『かわだ』に顔を出さない日は、一日中純子のことが頭から離れなかつた。ふとしたしぐさで見せる、アップにした髪を手で抑えるポーズ、そのとき覗く二の腕の白さ、うしろから見える、桃のような格好良いお尻、スウェーターを盛り上げているバスト、どれを思い出しても、少年の頃のように胸がときめいた。

寝ているときも夢を見て、女房が相手をしてくれないせいもあり、年甲斐もなく夢精することさえあつた。

純子と飲み歩くうちに、何度も口説くチャンスはあつたが、

「わたし哲夫さんは好きだけど、ホテルに行つたりするのは嫌、誰かに見られたら恥ずかしいから……」

純子は頑として誘いに乗らなかつた。

もう三月になつた。朝早くから夜遅くまで忙しい佐川牧場の中で、一人だけ仕事をしない自分を、従業員に見られるのが気兼ねで、すぐにでもここを出て、誰も知らない場所で純子と生活できたらと、夢のようなことを考えていた。

三月の下旬、佐川牧場では、有名馬の種付けによつて産まれた子馬が二頭、ある大物馬主との間で売買が成立して、買い付けの予約通り六千万円の入金があつた。

そのうちから二千万円が、孫たちへの将来の教育資金として、博子に預けられた。

その夜、博子は、

「貴方からお義父さんに、お礼を言つてください……」

嬉しさを隠しきれずに報告し、預金通帳を、いつも入れて置く筆筒の引き出しにしまいこんだ。

四月に入り、札幌地方にも春の気配が漂いはじめたとき、『かわだ』に顔を出した哲夫は、家から持ち出した二千万円の預金通帳を純子に見せて、

「半分あんたにやるから、二人で東京に行かないか？」

冗談に紛らわせて言つてみた。

「いいわ……」

純子の口から思いがけない言葉が飛び出した。その言葉で哲夫は目が眩んだようになり、我を忘れてしまった。

家に帰った哲夫は両親や博子に、

「八王子にある育成牧場に、自分の子馬を送り、将来のために育成を勉強したい」

この辺で生き方を変えてみたいと、真剣な顔で訴えた。

父親も、暫くの間は厄介払いが出来ることと、もし哲夫が本気で育成牧場で勉強する気になれば、なによりなことだと賛成した。博子も子馬三頭の世話をする手間が省けるので、哲夫の本心に気づかず、反対はしなかった。

三

神楽坂にあるスナック、『上海』のマスター玉木龍二は、女房の深雪がママとして店に出ているので、最近毎晩麻雀荘で時間を過ごしている。店でトラブルが発生したとき、すぐ駆けつけられる場所にいることを条件で、ママも大目に見ていた。

手先が器用で、記憶力の良い龍二は、麻雀仲間では名の通った存在だった。昔はゴト師まがいの仲間と組んで、相当あくどい稼ぎもやったのだが、一度ヤクザに現場を抑えられて半殺しの目に遭い、それ以来はおとなしく過ごしている。

神楽坂界限では、減多に負けこむことはなかったが、最近料亭の『山ふさ』で顔を合わせた、中小企業の社長だとかいう、香山という奴に二連敗した。

『山ふさ』はよい稼ぎ場で、特に最近出入りするようになった女客は上ガモだ。ゆっくり時間をかけて、吸い上げようと考えていたのだが、あの香山という男は気にかかる。

あいつ、なんで二回も目茶ツキしたんだろうと、驚いたフリをしていたが、あの打ち方は年季が入っていて、素人ものではない。それにあの分厚い拳は、空手かなにかで相当鍛えあげたものだ……。素性がはっきりするまでは、注意しようと考えていた。

こないだスナック『上海』に、『山ふさ』で麻雀をした田村という女が、亭主を連れて飲みに来たので、暫くつきあったが、なんでも北海道から二人で来たばかりで、まだ東京をよく知らないと言っていたが、あの二人が本物の夫婦じゃないことはすぐわかった。

亭主は牧場の跡取りで、八王子の牧場に育成のため、馬を何頭も預けると大ボラを吹いていたが、どこまで本当なんだか……。自分は麻雀でもやりながら、ゆっくり東京に慣れるつもりだなんて、余裕のあることをぬかしてやがった。話の中では相当な打ち手だと思ひこんでいるようだが、札幌と東京じゃレベルが違うことが、わかってないみたいだ。

まあいいさ、そのうちじっくり取りこんで、馬を本当に持っているなら取り上げたまおう。

俺も一年前から、ゴト師仲間と神楽坂界限をシマにしている、地回りの吉田と組んで、競馬のノミ屋をはじめている。資金は俺が出し表向きは吉田の経営にして、儲けは折半にしている。ちょうど甘そうな馬主が現れたのも、天からの授かり物だ。

それのだが、先日『山ふさ』で麻雀をしたもう一人の女。田村の話によれば、大変な金持ちだそう。なんでも銀座にある、大きな貴金属店の専務で、東京に出て来たとき、八王子の牧場主に紹介されて以来のつき合いなのだそう。

なんだか気の強そうな女で、苦手なタイプだが、いざれ纏めてカモにしてやろう。最近神楽坂に上ガモが集まりつつあるようで、急に世の中が明るくなってきた気がする。

龍二は、昨日佐川哲夫に誘われて、八王子で佐川の知人が経営する、競走馬の育成牧場を見てきた。佐川が育成を委託しているという三頭は、どれも良い馬に見えた。

中でも良馬の血筋だというサラブレッドは、調教師も、

「この馬は走るよ……」

と保証していた。育成のための預託料もばかにならないらしい。この齡のいったボンボンは、相当な金持ちなんだろうと、期待でぞくぞくしてきた。

こないだ一度、仲間を二人呼んで佐川をまじえ、初めて卓を囲んだが、札幌では負け無しだったと吹くように、なかなかの打ち手だが、散々修羅場を潜った俺たちから見れば、甘くてスキだらけだ。でも仲間と言ひ含めて、有頂天になる程勝たしてやった。佐川に、「あんたは麻雀の天才だな、札幌でナンバーワンだったのが、よくわかるよ」

煽つたのもわからずに、いっぺんに天狗になった様子だ。徐々に彼の持ち物を頂くような作戦をたてよう。

神楽坂で競馬のノミ屋を開く、吉田辰夫は龍二の幼馴染みだった。吉田は龍二に言われて、佐川哲夫を特別客として扱った。『マル特』と呼ぶこの制度は、競馬の賭金の決済は三ヶ月間のサイドがあり、当たり馬券は直ちに現金で払い戻す定めで、どんどん馬券を買わせる狙いがあった。

龍二と吉田は、『マル特』の客を厳選して、回収に問題のない人脈をつくりあげつつあった。『マル特』の資格を得るには、資産の裏づけが必要だと聞いた佐川が、龍二を八王子の牧場に案内したものだ。

龍二は、スナック『上海』を開店する以前、吉田と組んで、都内の麻雀荘を荒らしまわっていた時期があった。何年か稼いでいるうちに、結構業界で有名になってしまい、稼業人に目をつけられるようになった。一度こっぴどい目に遭って足を洗い、稼いだ資金でスナックをはじめたものだった。吉田との組み打ちには年季が入っていた。

スナック『上海』の二階が空いたので、借り増しして、手動式の麻雀台二卓を置いて、無許可営業を続けた。

最近では洗牌を、自動する麻雀卓がぼつぼつ出はじめたが、価格が高いし、詰め込みが難しくなるので、メンバーには麻雀は手で洗牌をするところに、醍醐味があるんだと吹聴していた。

競馬のノミ屋の『マル特』は、この部屋でも『マル特』だった。麻雀でも、競馬と同じように龍二が勝った場合は、三ヶ月以内の決済として、客の勝ち分はその場で支払った。マル特同志の勝ち負けについても、負け客からの要請があれば、心よく立て替えて支払った。

いつのまにかマル特の客たちは、競馬からも麻雀からも離れられなくなっていた。『上海』の麻雀ルールは、千点千円、半荘制で二万五千点持ちの三万点返し、それに一万円の総ウマなので、ハコテンになると四万円の支払いになる。

トップを取ればウマだけで三万円、プラス分を含めると五、六万円になり、ついた日は十万円くらいの勝ちは楽だった。

哲夫は純子と東京に出て来たとき、全然仕事を探す気配がなかった。札幌じゃ子供の教育費として、博子に預けた金がなくなっているのを知って、今頃は大騒ぎになっっているんじゃないかと考え、居場所は知らせず、知人にも口止めしてある。

「哲夫さん、なにか仕事を見つけないと、手持ちのお金なんかアツという間になくなるわよ、なにか宛てでもあるの？」

純子が心配そうな顔で言うのに、
「生活の心配なんかさせないよ、安心してよ、とりあえず麻雀で稼ぐから……」

純子がエツという顔で絶句していたが、俺の実力を知らないからで、そのうちに納得するようになると思っていた。

最近では麻雀で勝つ金も半端じゃないので、純子も納得しているようだ。ただし競馬での負けがこみ、純子と半分づつにした一千万円はもう殆ど残ってなく、その上借金まである。

ある日、麻雀にはたまにしか参加しない吉田が加わり、哲夫と一緒に卓を囲んだ。吉田は時折『マル特』と麻雀をするが、いつも勝つためしかなかった。この日も哲夫が二回戦つづけて段トツだった。一人、客が抜けたので、店に出ているマスターに声をかけてつづけることにした。哲夫が、

「どうだい、レートをもう少し上げないか、こんなレートじゃ競馬の借金払えないよ」
と言い出した。

「なんだい、それじゃ麻雀で勝ちつづけるつもりなのかい？」
吉田が茶化すように言うと、哲夫が、

「そんなわけじゃないけど、勝つにしろ負けるにしろ、競馬とバランスがとれないよ」
そこへ龍二が口をはさんだ。

「いいじゃないか、一度だけ佐川さんの言う通り、レートをあげてみようか」
もう一人の『マル特』にも異存はなかった。吉田が、

「あんまり気が進まないけれど……、いったい幾らにするんだ」
「三千円で、総ウマ一万円、ハコテンで十万円、キリがいいよ」哲夫が言った。

「えつ、そりゃ大き過ぎないか？」
吉田が目を丸くした。

「いいじゃないか、佐川さんが言うのだから、一度おつき合しようよ」
龍二の言葉に、もう一人の『マル特』も、近くのビルのオーナーの二代目で、毎月家賃収入が四百万円もある遊び人なので、

「おう、やろうやろう」

積極的に賛成した。

この日の新しいレートによる勝負は、半荘四回で、哲夫が三回のトップ、一回はマイナスなしの二位で、もう一人の『マル特』が一回トップ、龍二と吉田は四回とも惨敗だった。

哲夫はこの日の勝ちだけで、四十万円近くにもなり、意気揚々と家路についた。途中善国寺の前を通り過ぎるとき、朱塗りの門柱が目立つ本堂に向かって手を合わせ、このツキがつづきますようにと祈った。

日本国内での賭博の歴史は古い。『古事記』にも上流階級の公家たちが、賭け事を楽しむ情景が描かれている。

日本では、公営のギャンブルは盛んだが、私営によるものは一切禁止されている。パチンコなどギャンブルでなくゲームに過ぎない。それも取締機関が関与するようになって、ようやく景品交換が黙認され、庶民はささやかな賭博の気分を味わっているに過ぎない。世界中で、カジノや大がかりな賭博場が開かれているのだから、資源の少ない日本では離島や過疎の地域を開発して、大いに外貨を獲得すればよいのと思う。

麻雀でも法的には、少額な賭け金でも賭博罪が適用される。けれど賭けずに麻雀をする人間は少い。要するに国に寺銭を払わない博打は、許さないわけである。

刑法第一八五条。現代社会では世界的に、社交上のマナーにもなっているギャンブルを取り締まる日本の法律は、明治四十一年に改定されたままである。

五

賭け事では、ツキが大方の要素を占める。麻雀なんかは所詮『ツキのゲーム』だと言う人もいる。でも上手下手の差は歴然として存在する。

人間同志の対決で勝負するこのゲームは、特に反射神経が鋭敏な状態でないと選れを取る。力が均衡した勝負では、一度の牌の切り違いが命とりになる。哲夫はこのところボカが多い。

連日のような競馬、麻雀で頭の休まる暇がなく、たまには息抜きでもと、純子と遊びに出ても、そうしているうちに、ツキに逃げられてしまうような錯覚で落ち着かない。二人の夜の生活にも、勝負事に没頭している哲夫は、まるで関心がなくなっていた。

純子も最近、親しくなった黒川紀美子と一緒に散歩が増え、そちらのグループでのつき合いで、哲夫に対する干渉が減り、揉め事も少くなっていた。

哲夫はこのところ、麻雀ではカモだと思っていた吉田に、立て続けにやられている。折角レートをあげて、競馬の借金を少しでも減らそうと目論んだのが、逆に麻雀での借金まで殖え、焦りまくっている。

レートアップしたグループは、メンバーが決まっています、もう一人の『マル特』である、貸しビルのオーナーは浮き沈みが少く、『上海』のマスターもそこで、大幅にダウンしているのは、哲夫だけだった。このところ何回かの勝負で、二百万円を超える負けこみようだった。

途中、三人が組み打ちでもしているのではないかと疑い、注意してみたがそんな様子もない。それにしても吉田の勝ち方は異常だった。

以前は、彼が麻雀で勝つのをあまり見たことがなく、牌さばきもどことなくギョチなかつたが、レートアップして以来、殆ど勝ち放しだった。

哲夫も最初のうちは、単なるツキだと見ていたが、ツキもこれほどつづくとは本当には強いのではと、一種苦手意識のようなものが芽生えていたが、今日はようやく自分の方にツキが回ってきたようだ。今日は競馬も開催されていないので、朝のうちから麻雀がはじまっていた。『上海』も定休日なので、マスターの龍二も麻雀に集中できると張り切っている。

皆早打ちなので、午後の三時頃になると六局目に入っていた。食事も予め龍二が用意していた、握り飯を頬張りながらの熱戦だった。ここまでに哲夫は、四回トップ、二回がマイナスの少い二位と三位だったので、既に五十万円近く勝っていた。吉田はいつも慎重な打ち方で、振り込みの少い方なのに、今日はツキが 아니라しく一番マイナスしている。

哲夫はこれが本来の姿なのだと、自分に言い聞かせた。八局目に哲夫がトップで終了したとき、吉田が、

「それはそうと佐川さん、競馬の期限が過ぎているんだけど、そろそろ精算しようよ。今日の勝ち分は入れて貰えるんでしょうね」

哲夫は久しぶりの勝ちムードに、水を差された気がしてムツとした。

「ああいいですよ、それなら吉田さん、あと二局のトータルで、今日までの借金、二百五十万円ギリませんか？」

意気込んだように言われて、吉田も驚いた様子だった。

「今日はツキがないんで、そんな気になれないよ。それにもし佐川さんが負けた

ら、五百万になるよ……」

皆の前でバラされ、癪に触った哲夫が、

「五百やそこらの金なんか問題じゃないですよ、育成中の馬が、土浦のトレセン入りに決まったんで、高値がつくだらうから、もしものときは利息をつけて精算しますよ」

勢いに乗って言った。聞いていた龍二が、

「それならいっそのこと、その馬と借金全部ニギつたらどうなの？ 佐川さんが勝てば借金チャラ……」

煽りたてるような言い方をした。

「馬を貰っても仕様がないうよ。それに今日はツイてないから嫌だよ。マスターも無責任なこと言うなよ」

吉田が、いかにも恐ろしそうに手を振った。

「よし、決まりだ……、吉田さん男だろ、いこうよ……」

哲夫が調子づいて言った。吉田が観念したように、

「しょうがねえな、首筋洗ってつき合うか」

はじめから哲夫の勝ちを、予定したかのようなムードだった。他の二人も面白がって哲夫を煽った。九局目が終了したとき、二位の吉田と僅差で哲夫がトップだった。他の二人は白熱した二人の争いで打ち難そうだった。十局目、サイコロを振って席替えしたが、哲夫が東家で『マル特』が南家、龍二が西家で吉田が北家だった。南局に入り哲夫が親マンの一万二千点をツモって、それまでほぼ均衡していたのが、頭一つ抜け出した。

次の連チャンで、またもや親マンをテンパイしたが、龍二がタンヤオで軽く流した。南家の『マル特』が親になり、三巡目でリーチをかけて来た。哲夫も牌をツモると、索子の面前チンをテンパイした。四索七索の待ちで場の状況から判断して、待ちがよく、一筒を捨ててのテンパイだった。『マル特』の河には二巡目で四筒が捨ててあった。

哲夫が力をこめて、リーチ……と宣言して一筒を捨てた。

途端に『マル特』が、ロン！と大きな声をあげた。

ええーっ！ 思わず哲夫が覗きこむと、勢いよく倒した手は出来上がりの四暗刻で、一筒の単騎待ちだった。

この後は、気落ちした哲夫が焦って手づくりをしたが、龍二が軽く流して終局した。結果は『マル特』の一位、龍二がプラスの二位、三位がマイナスの吉田、哲

夫はラストだった。吉田はこの局では、最初からラス街道を走っていたが、哲夫の役マン放銃で救われた。二局で勝負がつかないので、あと一局ということになり、それでも決着がつかない場合は次回という約束で、最終回はじまった。

最終回では哲夫も自信があった。前回の『マル特』の和了は、たまたまの配牌のいたずらで、そう何度もあることではない。それよりも吉田の低調ぶりに、負ける気がしなかった。

今回の出親は『マル特』で、龍二が南家、吉田が西家、哲夫が北家だった。『マル特』は前回の役マンでツキが回ったようだった。四巡目でリーチがかかり、吉田が一発で振り込んだ。

やはり河に二マン、五マンを捨ててのカン八マンだった。手としては大したことになかったが、裏ドラを捲ると一筒の暗刻がドラになり、リーチ一発ドラ三枚、場の二翻で親マンになった。

連チャンで勢いづいた『マル特』が、また五巡目でパイパンを切り、リーチをかける。龍二が、その牌、ロン、と静かに手牌を倒した。手のうちは小三元のホンイチで、中と発が暗刻になっていて、満子の順子が揃いパイパン単騎の地獄待ちだった。裏ドラが中になったので子の倍マンだった。

「マスター、おめでどう」

哲夫は龍二の手を握った。次の龍二の親のとき、今度は吉田がタマテンの三翻でツモ和了した。『マル特』が、

「そんな和了で間に合うのかい？」

冷やかすように言うと、

「和了ぐせをつけないとね」

吉田は軽くないなした。次は吉田の親だった。力んで配牌を並べていた吉田の顔が、ガクツとしたように見えた。哲夫は手がよくないんだなど、ちよっぴり警戒心を緩めた。

哲夫の配牌は、タンヤオ三色のリャンシャンテン、ドラが二枚入っているの、ハネマンの手だ。今日は三色がついているなど考えながら、煙草に火をつけた。

余分な牌は一索と中だった。一巡目に二索を持ってきて中を捨てた。その前に南家の龍二が一索を捨てたので、一索は安全と思いい二索から捨てることにした。

二巡目に待ち牌を引いてきたので、一シャンテンになり、二索をまず捨てた。三人をそつと窺ったが、まだ誰もテンパイの雰囲気じゃなかった。

三巡目で哲夫は最高のテンパイをした。二、五、八マンの三メンチャンである。場

から見ても出やすい牌だ。興奮を押し殺して一索を切り、リーチ！と宣言した。その瞬間吉田から、ロン！と気合いのこもった声がかかった。

思わず煙草にむせた哲夫が、倒された吉田の手を見ると、なんと役マンの国士無双だった。目の前に火花が散った感じになり舌が纏れた。

「なんだなんだ、その前の南家の一索はよかったんか？」

愚にもつかない質問をした。

「今テンパイしたばかりだよ」

吉田が上気した顔で答えた。親の役マンだった。場面から考えても、もう挽回することは不可能だった。次の吉田の連チャンはノーテン流れになり、自分のラス親が来ても、シヨックが治まらないまま終局になった。

「今日で終わるわけじゃないし、取り返せばいいんだよ。なあ吉田さん今日のところは一応精算しておいて、もう一度チャンスをやれよ」

龍二が、気の毒そうな顔で言った。

「一応は約束事だから、今日は馬の譲渡契約書にサインして貰って、またその書類で勝負してもいいよ」

吉田が遠慮勝ちに言うので、哲夫もなんとなくホッとした気持ちで、譲渡契約書にサインして吉田に渡した。家に戻っても哲夫は純子に、馬の件については一切触れなかった。

数日後哲夫は、純子には内緒で八王子の育成牧場に顔を出し、問題の馬を残して、他の馬二頭を八百万円で譲渡し、これまでの預託料を精算して、残金を当面の生活費と賭博の元手として、純子に預けた。

哲夫から、これまでの勝ち金を精算してきたのだと聞いた純子は、驚いて目を丸くしたが、逆に金額の大きさに不安を抱いた様子だった。

北海道を出てきたとき、純子には家からくすねてきた三千万円のうち、半分づつ保管しようとして一千万円を渡してあったが、自分の分がこんなに早くなくなったとは言えず、あとはどうにかなるだろうと、相変わらず能天気なことを考えていた。

第四章

一

神楽坂にある善国寺の境内では、イチヨウの葉が散りはじめ、寺守りが落ち葉の片づけで大忙しだった。もう昭和五十六年の秋になった。

料亭『山ふさ』では、祭日を明日に控えて麻雀客が集まり、二部屋の二卓に分かれて熱戦が繰り広げられていた。

一卓では黒川紀美子、田村純子、香山武司に、最近新しく加わるようになった、不動産会社の社長だという田中である。

香山はここに、大体月に二回くらいのペースで、麻雀を楽しみに訪れていたが、殆ど負け知らずだった。集まるメンバーたちが、かわるがわる香山に挑んだが、大抵は返り討ちにあつた。

香山は前日から静岡に出張していて、会社の車で東京に戻る途中、『山ふさ』から電話があつたと知らされ、連絡したもので、『山ふさ』では、予定していたメンバーが一人欠け、あちこち探していたところだった。

「香山さんと呼んだら……」

黒川紀美子に言われた女将が、

「香山さんは、昼間は忙しいので来られないと思うけど……」

無理だろうと言いながら電話したところ、思いがけなく連絡がとれた。

香山もこの日は、もう一日静岡市に滞在の予定だったが、仕事が早く終わったので引き上げてきたもので、午後の予定はなかった。途中銀行に立ち寄り、手持ちの少なくなった現金を財布に補充した香山が、『山ふさ』に着いて麻雀部屋に入ると、紀美子が待つていましたとばかりに、

「随分ご無沙汰ね、私がおこに来るときは、いつもいらっしやらないのね、敬遠されてるのかしら……」

のっけからのご挨拶だった。

「いや、黒川さんの方がいつもお忙しいらしくて、行き違いなんですよ」

「それでもないみたい、私たちがお婆さんなので付き合いたくないのね、きつと……」

紀美子の言葉に、

「私たちって、私のことか？」

純子が香山をにらむ振りをした。

「お二人さんにはかいませんよ」

閉口したような素振りです、香山が先客の田中に挨拶をすると、

「ご商売ご発展で結構ですね、実は私の会社のスポンサーが、香山さんと同業なんです。幹部連中と会う度に、御社の話が出るんですよ。防衛庁へ建材を納入するグループの中では、最近御社の業績はずば抜けているそうですね」

香山はその言葉に、思わず相手を見つめ直した。確かにこここのところ活発な営業で、社業は好調である。しかしあまり表沙汰にしたくない裏面の動きもある。

「へえーっ、香山さんの会社、そんなに凄いんだ……」

紀美子が感心した声をあげた。

ゲームがはじまり、紀美子が、

「香山さん、これ……」

右手の人差し指をあげた。

「なんですか、その合図は」

田中が目敏く気づいて確認した。

「握りですよ、お入りになりますか？」

紀美子が説明すると、田中は、

「いや、今回は遠慮しておきます、そのうちに……」

加わらず、牌を裏返して洗牌をはじめた。一局目は紀美子が馬鹿づきをして、三ペコだった。そして香山はオーラスで安全と思つて捨てた牌が、紀美子のカンチャン待ちに遭い、子の倍マンを振り込みハコテンになった。

「うわーっ、これで今夜の麻雀大満足……」

紀美子が歓声をあげてはしゃいだ。

二回戦目は純子がトップだった。紀美子が微差で二位、男二人はハコに近く香山はまたもラスだった。紀美子が、

「本日は女性デー、香山さんは仏滅」

すこぶる上機嫌だった。この夜は十二時半の九局で終了した。トータルでは紀美子が十二万点の浮きでトップ。純子が五万点のプラスで二位、田中がトントンで香山の一人負けだった。

香山も紀美子も徹夜麻雀はやらない主義なので、田中だけが後に残り、別の部屋の徹夜組に合流して解散した。

『山ぶさ』の路地から表通りに出て、流しのタクシーを待っているとき紀美子が、

「香山さん、これから赤坂の例のお店に寄りませんか？ 今夜は沢山勝たせて頂いたので、このまま帰るわけにはいかないわ」

傍で純子も頷いていた。

「申し訳ない、ご一緒したいんですけど、今朝は早くから来客がありますので、また近いうちに……」

香山は出張帰りなので、仕事が出張していた。

「わかりました、今夜のお楽しみはお預けにします、そのかわり来週あたり麻雀じゃなくて、お会いしたいのですけれど、純子さんも交えてご相談したい事がありますので……」

純子も是非にと言い添えた。

「いいですよ、前もつてお電話頂ければ時間を空けます」

香山が答えているうちにタクシーが来た。先に乗るように言われた紀美子が、途中で降りる純子と一緒に走り去ると、間もなく次のタクシーが来たので、香山は独り住まいである早稲田のマンションに向かった。

二

田村純子は、哲夫が競走馬をスナック『上海』のマスターたちに奪られた、との噂を耳にして哲夫に確かめた。哲夫はふてくされた様子で、

「そうだけど、今それを取り戻す勝負の真つ最中だから、ごちゃごちゃ言わないでくれ」隠していた後ろめたさもあつて、噛みつくような剣幕だった。

純子は元々自分のものではないけれど、これから先の生活設計をどう考えているのか、暗澹とした気持ちに包まれた。札幌を出るときは一時的な気紛れで、哲夫との将来に亘る人生計画など考えもしなかったが、一緒に暮らすうちにそれなりの情が育ち、出来得るならこのまま添い遂げたいと思うようになっていた。

紀美子も噂を聞いたらしく、心配してくれたが、親しい仲でも自分たちの情けない状況を、すべて打ち明けるのにためらいがあった。どんな経過で馬をとられたのか、確認したかったが、哲夫に聞いてみても、

「そんな事、お前が口を出す問題じゃない……」

にべもなく一蹴され、ただ悶々とするばかりだった。最近では生活費も満足に渡してくれなくなり、そうかと言って今更水商売に出られる年齢でもなし、思い余つて

札幌の母親に電話で愚痴をこぼすと、母親が、

「少しだけど、当座の生活費ぐらい送るわ……」

そろそろ見切りをつけて戻っていらっしやい、と言いながら銀行の口座番号を訊いた。純子が、そんな心配をかけたくないと言ったが、三日後に二百万円が振り込まれてきた。この金のあるうちに、なんとか身の振り方を決めたいと、追い詰められた気持ちでいる純子を察したように、

「純子さん、男の世界の事は女じゃわからないわ、一度香山さんにも相談して、意見を聞いてみたら？」

紀美子の心遣いが嬉しかった。香山とは長いつきあいではないが、彼の暖かそうな人柄に、なんでも話せそうな気がして、その意見を参考にして、自分自身の将来を決めるきっかけでも掴めれば、と思うようになっていた。

黒川紀美子は、最近曾根村と話し合って、彼が水戸で妻子のために豪邸を新築したのを機に、二人の關係にピリオドを打った。

なまじ以前からの愛人關係を引きずっていたのでは、お互いの私生活まで干渉し合い、折角好調な会社の脚を引っ張りかねないと、お互いの良識で判断した。

曾根村ももう年齢だし、娘たちも成人し、父親の行動に一々干渉するようになっていて、これまでのような、あまいな生き方は出来なくなっていた。

話し合いにより、曾根村が豪邸を紀美子に無断で新築した事を、今後一切追及しない約束で、紀美子が歌舞伎町でクラブを経営することに合意した。

最近紀美子は妹の信子から、
「水商売に慣れてきたし、得意客も相当出来たので、そろそろ独立したい……」

再三相談を持ちかけられていた。信子の言うことを全面的に信用するわけではないが、先行きの生活について保険をかけたつもりで、踏み切ろうと考えていた。

紀美子は蓄財型の性格ではなく、これまでは会社が発展しさえすれば、生涯生活の心配はないと、何事によらず商売中心の生き方だったので、あまり金銭には執着しなかったが、それでも一億円くらいの貯金が、いつの間にか残っていた。

歌舞伎町の風林会館から、職安通りに向かって左側、バッテリーセンターの手前に新築中のビルがあり、地階部分の幾つかのスペースで、高級クラブとしてのテナントを、募集している情報を信子が聞きこみ、出店には資格審査があるので、是非応じて欲しいと紀美子に頼みこんできた。紀美子は純子にも相談したが、香山からも一度じっくり意見を聞いてみたいと考えた。

離婚したあと、一人娘と別れねばならなかった悲しみを背負いながら、中野で喫茶店を開業して以来、いろんな出来事に遭った。夢中でいるうちにもう十数年が流れた。

婚家先に残してきた娘の陽子は、もう十七歳になる。どんな毎日を送っているのだろうか、どんな顔になっているのだろうか、これまで何回か近くまで行つて、それとなく様子を探ってみたが、後添いの母親に子がないので大切に育てられていると聞き、娘の幸せを考えて、二度と近づかないようにした。

昔読んだ田村隆一の詩集で、『時が過ぎるのではない、人が過ぎるのだ……』、心に残る一節が、今更のようによみがえってくる最近だった。

今日午後五時から、歌舞伎町で開店するクラブ『くろかわ』のお披露目がある。新しく完成したビルの地階には、クラブが三店舗同じ時期に開店する。

他の二店は、一つが保守党代議士の浜島の二号が経営する『やまなみ』で、もう一店は、このビルのオーナーが、自営のクラブをはじめた。ここにテナント契約するための審査の基準が、ある程度以上の社会的な信用と経済力を必要とし、土地柄から正業の人間を選ぶのは当然なことであるが、ビルの美観上の問題として、店内のインテリアにまで干渉してきたのには抵抗があった。

開店準備が整った約三十八坪の店内は、ダークブラウンを主体にしたインテリアが、落ち着いた風格を感じさせ、すっきりとした品の良さを醸し出している。

濡れた茶色は、生氣を取り戻す色と言われる。茶には美りの秋の豊かき、充実感、成熟というイメージがあり、この色には味覚にかかわる心が潜んでいる。

祝い客に囲まれた信子は、我が人生の晴れ舞台とばかりにはしゃいでいるが、本当に大丈夫なんだろうか？ 最初のうちはなるべく傍で見守るつもりだけれど、諺のように『二兎を追うものは一兎も得ず』になったら困るし、それに先日香山と食事したとき、彼の言ったことが耳に残っている。

「信子さんは経営の経験があるのですか？ クラブも大変な事業ですから、よほど経営感覚がないと、苦戦するのではないでしょうか……」

三

『くろかわ』が開店して、三日間はお披露目だった。紀美子が今日まで培ってきた人間關係の、総纏めのようなものだった。ともかく、招待客として予定していた人数以上に、飛び入りの客が増え、準備した料理が不足した。

招待状を受け取った側の口こみで、黒川専務がオーナーの店なら、お祝いで顔を
出しておかなければ、という客が押しかけた。信子の『城塞』におけるお得意さん
には、紀美子の意向で一切招待状は出さなかった。

信子はそれが不満だった。『城塞』に勤めていればこそそのマスターだし、今更な
んで気を遣う必要があるのだからと思っていた。それに『城塞』の客たちに、ママ
としての晴れ姿を見せたかった。

一日の招待客が三十人、少し余裕を見て三日間で百人、その様子で営業見通しを
つけようと考えた。三日間のお披露目については、二百万円の子算を組んだが、結
果的に五百万円近くのご祝儀が集まった。見栄を張るのは宝石業界の体質であり、
彼等は競ってご祝儀を奮発した。

ホステスは知人の紹介や、新聞募集などでなんとか六人は確保した。紀美子から
見て少し不満なレベルだったが、信子は満足していた。

人数さえ揃って、ある程度の客あしらが出来れば、あとは私が高んとかする
……。ホステスには頼らない。そんな気負いがあった。それにもう一つ紀美子に対
しての不満があった。開店前日準備が終わった『くろかわ』で、全員が集まって、
翌日のリハーサルを行ったとき、紀美子が香山という、日本橋にある会社の社長を
連れてきて、従業員の前で、

「この人はお店の顧問ですから、私の言うことと同じだと思って聞いて下さい」

私というママがいるのに、あんな紹介をされたら立場がなくなると、胸にわだか
まりが残った。

『城塞』のマスターは、店の客が『くろかわ』に流れるのを警戒し、『くろかわ』
に顔を出さないように根回しをした。顧客たちも『城塞』におればこそその信子で、
マスターと気まづくなってまで、信子の店に顔を出す義理はなかった。

それでも二、三人は、信子とごく親しい関係になっていた。マスターには内
緒だよと言って顔を出してくれた。信子はあてが外れたが、紀美子の関係客で連日
満員な状態なので、そのうち『城塞』側の監視の目も緩み、自分の客が顔を出しは
じめるだろうと、たかをくくっていた。

そのうちに信子は、自分が飲みに行った先で知り合った、ギターの弾き語りをする
若い男を雇い入れ、伴奏をさせることにした。

紀美子は、『くろかわ』が開店以来好調なので、一安心していた。ただ最近気にな
っているのは、信子のホステスたちに対する態度だった。好ましそうな客が来店
すると、直ちに自分が席に着き、ホステスをヘルプ扱いにする。

ホステスたちも、大ママが店にいるときは、のびのびと活発に振る舞うが、マ
マだけのときは大分雰囲気暗いらしい。今夜は久しぶりに純子に連絡して、二人
で店に来たのだが、そんな状況をホステスがそっと耳に入れたので、気がかりだっ
た。

純子が香山さんに暫く会っていないので、声をかけてと言うので、紀美子が会社
に電話すると香山は在社していた。純子と飲んでるので宜しければと誘うと、九
時頃になるがそれで良ければとの返事だった。

八時を過ぎた頃から客が立ちこめてきた。店の奥に三人分の席を確保して飲んで
いると、香山が入ってきた。タクシーで来たが、道が空いていたので、意外に早く
着いたとのことだった。

大分腹を空かせているらしく、出された水割りよりも、テーブルにあるチキンの
から揚げや、ツマミに手が伸びた。

「相変わらずお忙しいのね」

純子が言った。

「貧乏暇無しでね……」

香山は言いながら水割りを口にした。

「香山さん、先日私からの伝言、事務員さんから伝わったのかしら」

純子の言葉に香山は、

「あつ、聞いてます。明日、明日と思いつながら日が経ってしまい、申し訳ありませ
ん」

恐縮した様子を見せた。純子は紀美子が忙しくて相手にしてくれないので、香山
に電話をしたが、一向に返事がなかったと、いささかお冠の面持ちだった。

香山は飲んでいこううちに、気になる光景を再三目にした。ママがホステスに席替
えの指示をするとき、怒ったような顔つきで命令し、ホステスは、それまでお相手
をしていた客を無視するような態度で、席を立つことであつた。

紀美子も気がついていられるらしく、ママが席替えの指示をする度に、注意して見て
いる様子うかがえた。顔の緒らんだ純子が、

「香山さん、何か歌って……」

せがんできたが、店の様子が気になっている香山は、唄う気になれなかった。香
山が、

「ちょっと出ませんか……」

紀美子に言うと、彼女も待っていたように頷いた。

「随分早いお開きね、どうして？」

純子が怪訝な顔で訊いた。

「ちょっとわけ有りなので、もう一軒つきあって」

紀美子の言葉に、純子と香山が席を立ち表に出た。紀美子が先に立って風林会館の喫茶店に入り、紀美子がビールを注文した。

「何かあったの？」

心配そうに訊く純子に、紀美子が、

「香山さん、気がついていましたでしょう、ママとホステスたちのこと」

眉をひそめて香山に問いかけた。

「ええ、気になりました、あのままではまずいですね、ホステスの教育はどうしているんですか？」

「それはママの仕事ですけれど、やはりまだ経営者としての自覚が足りないようね」

「この際、はっきり言ってやらないと、気がつかないのじゃないんですかね。ママが店のナンバーワン気取りでいたんじゃないよ」

香山が思ったままを口に出した。純子が傍でなるほど頷いたが口はさまざまかった。

「どうすれば良いと思われませんか？ 方法があったら教えて下さい」

「それはまずママの教育が先です、それが出来るのは黒川さんだけです。ホステスたちには、よければ私から言って聞かせましょう。黒川さんには遠慮して、ホステスたちも言いたくないでしょうから」

「是非お願いします。ホステスたちにはどう連絡しますか？」

「それは私が、リーダー役のアケミに電話をして、段取りをしましょう」

香山は店内の人間関係を大体知っていた。香山が立ちあがり、電話にアケミを呼び出し、翌日の打ち合わせをしたが、アケミも香山には、是非会いたいと思つたところだと息を弾ませた。

このあと、紀美子は閉店後信子と話し合う予定で、店に引き返すことになり、香山は純子にもう一軒つき合うことにした。

「二人だけで変なところに行っちゃ駄目よ、ちゃんと尾行をつけますからね」

紀美子が言うと純子が、

「何言ってるのよ、これでも人妻ですからね、でも香山さんがどうしてもっておっ

しやるなら、今夜だけ人妻じゃなくなるけれど……」

わざとらしく香山に肩を寄せると、紀美子が目を大きくして香山と純子を睨んだ。

この夜、純子の知り合いだという、歌舞伎町のスナックに寄った香山は、純子が早いピッチで飲み出し、午前一時を回っても帰ろうとしないので、酔いも中途半端のまま純子に合わせるのに苦勞した。純子は何か大きな悩みを抱えている様子で、酔う程に整った顔が、内面から出る包み隠せない思いに歪むのを痛ましく眺めていた。ようやく純子をなだめてタクシーに乗せ、住まいに戻ると、時刻はもう三時を過ぎていた。

四

香山が約束の五時に、コマ劇場の裏手にある喫茶店に入ると、アケミの他『くろかわ』のホステス全員が待っていた。打ち合わせをはじめると、口々にママの信子に対する批判がとび出した。

要約すると、ママはまるで自分たちと、競争相手のような感じで、私たちを部下と思っていないようだ……。恐らく大ママの手前を取り繕うことしか、考えていないのではないかとのことだった。

「ママも経営者なんだから、まさかそんなことはないだろうけど」

香山が言うと、アケミが、

「どうかしらね、あのママは、何かこれまでのうつぶんでもあるんじゃないから、この間も大ママに注意されて、大ママがお店を出ていったあと、私たちに聞こえよがしに、『今に見ている……』って言ってたわよ」

香山は、たとえ姉妹の感情の行き違いがあるにせよ、従業員の前でむき出しにするのは困ったことだと思つた。ホステスたちの胸に鬱積していたわだかまりが、ある程度出尽くした状況になったので、

「いずれにしてもママには、君たちから聞いたとは言わないで、注意をするつもりだけれど、ママも経営には慣れていないので、どういう態度を取ったら良いのか、わからないのかも知れないよ。悪いようにはほしくないから、もう少しママに協力するつもりでいてくれないかな。それから席替えのとき、お客さんに対してはにこやかに挨拶して、席を立つべきじゃないかな、君たちはプロなんだから……」

香山は努めて和らいだ口調で説得した。

「あら、お気づきだったんですか、私たちもついママに合わせてしまつて……、早速今夜から注意します」

他のホステスたちも頷いた。香山は、

「これからも何かあったら、なんでも言つてきて下さい。会社に連絡してくれば、いつでも相談に乗るから」

全員に名刺を渡した。

開店の時間が迫つたので、また定期的に意見を交換し合おうと約束して解散した。その後風林会館に回り、待つていた紀美子と合流した。香山が席に着くなり紀美子が、

「夕べ大丈夫でした？ まさか純子が離縁されるようなこと、なかったでしょうね」

冗談めかして言うので、

「じつはそのことで、これからどうしようかと思っているので……」

香山が思わせ振りの言い方をする、紀美子がギョツとしたような素振りを見せた。

「冗談ですよ、そんなことになるわけがない……」

香山が紀美子の反応に、慌てて発言を取り消した。

店の話になり、紀美子は、昨夜信子とじっくり話し合ったが、表面的には了解した振りをしていただけ、信子は何か相当屈折した感情を、抱いているようだった。

香山は、ホステスたちと打ち合わせた件については、

「ママからの指示は素直に受け取り、客に対してはプロとしての礼節を尽くすように注意したら、皆わかりましたと言って、今夜から実行することになった」

紀美子もわかっているようなので、信子についての心情的な説明は省いた。紀美子はこれから店に行つて、そのあとの様子を見たいと、香山に同行を求めたが、

「今夜はホステスたちの手前もあるし、かえつて大ママ一人の方が観察し易いと思う」

ビールを一本注文し、紀美子と半分ずつ飲んで別れた。

自宅に入ると、待ち受けたように電話が鳴つたので出ると、神楽坂の『山ふさ』の女将からだつた。

「社長さん、随分お見限りですね、黒川さんのお店も結構ですけれど、たまにはうちの方へもおでかけ下さいよ。それにちよつと耳にしたことですが、黒川さんも

あれでなかなか油断の出来ない人みたいですよ、騙されなけりやいいがって、言ってる人もいますよ」なんの根拠があつてのことだか、さも憎々しげな口調だつた。香山は何事も自分中心でしか考えられない、次元の低い人間関係に寒々しさを覚え、これから先、神楽坂に足向けるとはならないだろうと考えた。

佐川哲夫は最近、自分が蟻地獄に嵌まりこんで、身動き出来なくなったような気分が襲われている。一時的に勝つことがあっても所詮は博打……。昔から『場が朽ちる』と言って、儲けるのは胴元だけである。

あれ程夢中になって、駆け落ちまでしてきた純子も鼻についてきた。この頃はすっかり女房気取りで、煩わしくて仕方ない。

それに比べて、札幌の牧場で文句一つ言わずに、身を粉にして働いていた女房の博子が、懐かしく思えてならなくなった。

この間札幌の自宅に、夜中に電話したら博子が出た。黙って声を聴いていたなら、「誰なの？ お父さんでしょ、いつまでも馬鹿なことやっていないで、早く帰っていらっしやい。お義父様には貴方のやっていることは皆わかっているんですよ、この間も、もう金も馬も無くなったことだろうし、そろそろ戻ってくる頃だって言うてたわよ」

一方的に喋った。哲夫は一言も話さずに電話を切った。

一度馬で精算して以来、『上海』のマスターや吉田には、また麻雀と競馬の借金が三百万円以上も溜まっている。

他の麻雀荘にたまたま誘われたとき、メンバーの一人が哲夫に、「あんた、玉木や吉田に馬を奪られたんだって？ あの二人にかかっちゃ、そのうち命まで奪られるぜ」

昔は有名なイカサマ師で、『上海』はその金ではじめたようなものだ。バックにはヤクザが控えているんで、気をつけた方がいいよって注意された。

東京って恐ろしい所だ、とても札幌の遊び人には歯が立たない……。目から鱗が剥がれたような気がした。そして矢も盾もなく札幌に帰りたくなった。純子にそれとなく話してみたが、

「今更どの面下げて、札幌に帰れるのよ」

えらい剣幕で罵られた。このまま借金を残して逃げれば、気性の激しい純子が、どんな事態を引き起こすかも知れず、帰るに帰れず頭を抱えていた。

純子は哲夫との生活が、終わりに近づいているのを予感していた。表面ではさりげなく日常会話を交わしているのだが、心の交流も軀の交わりもなくなっている。一頃は哲夫と別れても、東京に一人で残って、出来れば紀美子と一緒に何か商売でもと考えたこともあったが、妹の信子に先を越されその望みもなくなった。最近紀美子も以前のような親密さが薄れている。きつと気持ちが香山に傾いてしまつたに違いない。

札幌に帰れば、母親は暖かく迎えてくれるに違いないが、こんな状態で帰れば物笑いの種だろうし、店にも出られない……。

哲夫には未練はまったくないが、これまでのあと始末をどうつけるか、なまじ哲夫より齢上だけに頭が痛かった。

香山とはどうしても一度、じっくり話し合いたい。この間はじめて二人だけで飲みに行ったけれど、あの店ではゆっくり自分の思いを伝えることも出来ず、苛々してつい飲み過ぎてしまった。

早いうちにもう一度機会をつくって、香山と紀美子が男女の関係にならないうちに、自分の悩みを全部打ち明けてみたい。それには哲夫と別れたあとじゃないと、香山は相手にしてくれないだろうと考えたり、気持ちの整理がつかない毎日だった。

二

信子はクラブ『くろかわ』を成功させれば、世間からそれなりの評価を受けられるようになり、これまで常に、姉の付き人のような目で見られてきた屈辱から、抜け出すことが出来ると、懸命に努力しているつもりだった。

昔、学生時代は、姉が勉強嫌いでやっと高校を卒業したのに比べ、自分は地元の名門高校を上位で卒業したのに、家が貧乏だったので進学もせずに、ホテルに就職したため、変な奴と一緒にいる破目になったので、家の犠牲者だと思ひこんで生きてきた。

それに多少の援助を笠に着て、いつも召使のような扱いをする姉に、漠然とした反感を抱きつけていた。『城塞』に勤めているときでも、いつも働いているのは自分で、同じ姉妹なのに姉はいい格好して金を遣い、そんな金があるなら私に回してくれれば、こんな苦勞して働いている必要もないのにと考えたりした。

『くろかわ』をはじめるときも、全部自分に任せると思ったら、大ママの立

場で店に顔を出し、煩いことばかり言う。その上、香山とかいうわけのわからない男とくっついて、私を監視させるような真似をする。

この店はなんとしても、私だけのものにしなければ、これまで苦労した甲斐がない。周囲の人間はいつも姉と私を比べて、姉に軍配をあげているようだが、今に見ているそのうちに……。歯がみするような思いでいた。

どうやら今年の梅雨も明けたようだ。今日は金曜日で、毎週この日は開店間もない時間から満席になる。七時になり店の看板に灯が入ると同時に、二人連れの若いサラリーマン風の客が来た。

「一見さんなので、アケミがテーブルに案内して、」

「いらっしやいませ、どなたかのご紹介ですか？」

「うん、いつもこの店にきている人の紹介で」

片方の客が答えた。アケミは誰かしらと考えながらオシボリを渡し、注文のビールを運んだ。いっときするうち客が混み出し、最初に入店した客は、たった一本のビールを前にして、グラスを空けようともせず、店内を眺めまわしていた。

八時に出動してきたママが、その客のテーブルに近づき、

「いらっしやいませ、どなたかとお待ち合わせですか？」

「この店の常連の紹介で来たんだよ」

「ぶっきらぼうな口調で言った。」

「常連さんで、どなたですか？」

「ママが再度訊ねると、」

「どなたもないよ、常連は常連だ……」

うそぶくような返事だった。一見サラリーマン風な外見だったが、気がつくときつきに、ただならぬ凶暴さが滲み出ている。

「何か他にご注文は？……」

ママが機嫌をとるように言うと、

「いや、医者からアルコールを控えるように言われているんだ」

二人で顔を合わせてニヤついた。

「申しわけございません、混み合ってきましたので、ご注文がなければカウンターの方へ席替えして頂けないでしょうか」

頼んでみたが、

「いや、俺はここが気に入っているんだ」

頑として動く気配もなかった。ママは店でたった一人の男の板前と相談するつもりで、奥に引っこんだが、店の雰囲気が見る間に重苦しくなった。

板前が、厨房との仕切りから暫く窺っていたが、

「ママあれは地回りですよ、恐らくみかじめ料のことで来たんじゃないですか」

言いながら表に出ようとはしなかった。開店当初から大ママには、

「そのような人間がきても、絶対に応じてはいけません。そんなときは私は雇われママなので、オーナーに話しておきますと言って、一旦は帰って貰いなさい。あとは私の方で解決しますから……」

念を押されていたのだが、店内の注目がそれとなく自分に注がれている気配に、

「私がここの経営者なので、話したいことがあるなら、ほかで伺いましょう」

強がりの姿勢で言った。二人組は待っていましたと立ち上がり、片方が、

「それじゃ、出かけましょうか」

ママを挟むようにして表に出た。

信子は『城塞』のマスターが、いつもチンピラには少しばかりの小遣いを与えて、追いかけていたのを知っているので、二万円もくれてやれば済むものと考えていた。

風林会館の喫茶店で、二人連れのうちの太柄な男が、

「ママさん、早速話に乗ってくれて有り難う、状況はわかっているんだろう？」

片目をつぶって、ママの顔を覗きこんだ。

「よくわからないけど、とりあえずこれで……」

信子が封筒に入れた二万円を渡した。中を改めた男が、

「ママさん、何か勘違いしてるんじゃないの？ こんなもの貰いたくて店に顔を出したんじゃないんだよ。ここに契約書があるんで、おつまみとおしぼり、それに店に飾るレンタルの絵の契約をして貰いたいですよ」

連れの男に、契約書らしいものを取り出させた。

「それって、月にどのくらいかかるものなんですか？」

信子が訊くと、

「なあに大した額じゃないですよ、全部入れても二十万円ぐらいなものですよ」

ここで信子は、自分が大変な局面に立たされていることに気がついた。

「あら、そんな金額じゃ、私の一存じゃ決められないわ」

冗談じゃないという素振りと言った。

「何言ってるんだ、さっき私が経営者だと言ってここまで来たんじゃないか。こちらも貴重な時間なんだ、とほけるんじゃないよ」

一転してむき出しの本性が、顔と言葉に出た。信子はその剣幕に震え上がった。震えている信子を見て、二人は組し易いと思つたのか、煙草に火をつけて煙を吹きつけた。

三

そのとき、正面の入り口から、大ママと香山が近づいてくるのが見えた。店での不穏な空気を察したアケミが、そつと大ママに連絡し、紀美子が香山に連絡して『くろかわ』に駆けつけたが、風林会館に入ったのを、あとをつけたアケミから聞いて、やってきたものだった。

信子はホツとして、目の前にあるおしほりで涙を拭った。席に近づいた香山が、店のオーナーですが、お話を伺わせて下さい」

言いながら、二人の目の前に腰を下ろした。「話ならこのママに全部したよ、あんたたちがオーナーか、それじゃ話が早い。この契約をして欲しいと話していたところだ」

香山が信子に向かって、

「あとは引き継ぐから、早くお店に戻りなさい、大ママもどうぞ」と言つたが、紀美子は信子だけ先に帰した。香山は契約書を一通り読んで、

「これはお受け出来ませんね、うちの店はもう仕入れ先が決まっていますよ」

「そんなことはどうでもいいんだよ、契約をしてくれるかどうかの問題なんだよ」

「でしたら、はっきりお断りします」

香山の毅然とした態度に、相手は香山がどんな筋の人間か、判断に迷つた様子だった。

「あんたオーナーかなんか知らねえけど、あの界限は誰のシマか知って言ってるんだらうな」

「知ってますよ、日本という法治国ですよ」

「なんだと？ お前さん俺たちを、おちよくっているんか？」

急に大声をあげたので、店内の視線が一斉にこちらを窺つた。紀美子は思わず身を固くしたが、

「あんた、そんな大声を出さなくなつて、よく聴こえますよ」

香山が言うのと、男は一瞬言葉に詰まつた。片方の男が傍の椅子を蹴り倒した。派手な音を立てたが、香山は悠然としていた。

「てめえ、どこの者だ！」

躰のいかつい男が吠えた。

「吉岡会長に、香山だと言つてくれればわかりますよ」

その言葉に二人の男が、息を呑んで、顔を見合わせた。吉岡はこのシマを受け持つ花村組が所属する、関東連合会の総長で、花村組長は直系の若頭だった。

「それじゃオーナーは、吉岡総長の筋なんですか？」

「まあそんなところだ……」

「あいや、そりゃ失礼しました、何も話を聞いてなかったので。それじゃまた改めてお詫びに伺いますんで」

「いや、それはいいよ、それより今日の事はなかつたことにしよう」

「そうして頂ければ助かります」

香山は片方の男に封筒を渡した。男は押し頂いて帰つていった。封筒には五万円が入れてあつた。そしてもう二度と『くろかわ』には、この種の干渉はなくなる筈だった。

香山は、かつて防衛庁の付属機関に在職中、配下の職員四人を連れ、歌舞伎町で慰労会を催したことがあつた。猛暑つづきだった夏が過ぎ、ちらほらと枯れ葉が舞いはじめた季節だった。

香山の知人の紹介で、区役所通りに面する、落ち着いた雰囲気のレストランに入り、夕方六時の開店を待つて会食をはじめたが、広い店内には香山たちだけであつた。

男子二名と女子が二名の、配属されてきてまだ半年足らずの、若い職員たちだったが、明日は休日とあつて、心身ともにリラックスしてはしゃいでいた。

暫くすると、二人連れの中年で派手な服装の男たちが入つてきて、大分離れた奥の席に着き、料理を注文しておいて、額を寄せ合いにやら密談の様子だった。

香山のグループでは、それぞれが勝手なことを喋り合い、日常業務からくるストレスを発散していた。

そのとき、いきなり表から目だし帽を被り、紺色の作業服を着た男が二人駆けこんできた。二人とも手に拳銃を構えていて、一人が香山たちを牽制し、一人が奥の客に向けて拳銃を発射した。

驚いた香山のグループの男子職員が立ち上がると、男がいきなり職員に向けて引き金を引いた。肩の辺りから血を吹き出させた職員は、叫び声をあげて昏倒した。

咄嗟に香山が男に接近し、目にも止まらぬ素早い動きで、拳銃を持つ手を蹴りあげた。拳銃が轟音を発してふっ飛び、もう一人の男が、慌てて香山に拳銃を向けたのに、間も与えずに手刀で撥ねあげ、まわし蹴りを男の首に放った。

片方の拳銃を飛ばされた男が、短刀を取り出し意外に素早い動きで香山に突きかけた。身を躲した香山が、正拳を男の顔面に叩きこんだ。グエーツ！ 異様な声で男は倒れこんだ。一瞬の出来事だった。

「救急車の手配っ！」

香山の指示で、男子職員がレジの傍にある電話に飛びつき、一一九番に通報した。

香山は倒れている職員に駆け寄り、他の職員たちに出させたハンカチを繋ぎ合わせて、怪我人の左肩の付け根を緊縛した。傷は左腕の中段を貫通していた。

その頃になって、先程狙われて床に伏せた、男たちが近づいてきて香山に、

「お陰で助かった……、怪我人が出て申しわけない……」

口々に礼を言った。襲ってきた男二人は、切迫した息遣いで床に倒れたまま待たされた。

間もなくサイレンの音が聴こえ、救急車とパトカーが同時に到着し、警官や救急隊員たちが駆けこんできた。

救急隊員たちは直ちに、三人の怪我人を運び去ったが、パトカー二台で駆けつけた警官は店内の人間に、事情聴取が済むまで店を出ないよう言い渡した。

警官は襲われた男を知っているらしく、

「事情を訊きたいので、暫くの間待機してください……」

丁寧な口調だった。

奥の方ですくみ上がっていた店の人間も、全員ホールに集められて、それぞれに事情聴取がはじまったところに、何人かの屈強な男が入ってきて、制止する警官と言い争いになった。

香山は怪我をして運ばれていった男の仲間かと、一瞬緊張したが、その男たちは襲われた男の身内らしく、奥の席で椅子に腰掛けている男に向かって口々に、

「おやじさん、大丈夫ですか？」

心配そうな顔で声をかけた。

「おう、俺たちはなんともない、お前たちもあまり騒ぐな……」

男がドスの利いた声で、駆けつけてきた男たちをたしなめた。

四

歌舞伎町の事件は、いち早くマスコミにキャッチされ、防衛庁の幹部職員が引き起こした、暴力沙汰としてお茶の間を賑わした。

撃たれた職員は、幸い後遺症も残らずに回復する見通しで、香山の正拳を食らった男は、一時重体に陥ったが持ち直し、片方の男も軽傷で済んだ。

警察では、とばかりを受けた正当防衛だと弁護してくれたが、マスコミは面白おかしく尾ひれをつけて、ここぞとばかりに防衛庁を攻撃し、話題づくりの材料にした。

襲われた側の一人は、歌舞伎町の一部をシマにする吉岡組の組長で、関東連合会の副会長でもあり、次期の会長と目されている男だった。そのことが尚一層話題に拍車をかけ、防衛庁の幹部が、ヤクザの親分を身を挺して守ったとのデマが飛び交った。

防衛庁では、優秀な人材をできれば擁護したい考えだったが、マスコミが許さなかった。政治家たちも己の保身のため、状況を知りながら、表面切つて弁護する人間は一人もいなかった。防衛庁のトップには、政治家がたらい回しで就任する。こうして国の将来のために一身を捧げようとしていた男が、一人寂しく職場を去った。

ある日、民間人として生活をはじめた、香山の住まいを一人の男が尋ねてきた。二人の護衛を供にしてきた男は、吉岡と名乗る、あの日歌舞伎町で襲われた男だった。

彼はどこで聞いたのか、香山があの事件が元で退職させられたのを知って、訪れたものだった。

「香山さん、宜しかったら私のところで、二三年休養されたらいかがですか？ 別に組に関係してくださいというのではなく、私個人の友人として、お付き合い願えば有り難いのですが……。あの件は本来なら、人命救助として表彰されるべきことなんだが、なんせ私の生業（うごわい）のため迷惑かけてしまつて……」

知らなければ、ヤクザ組織の大立者とは到底見えない表情で、香山を口説いた。「有り難いお言葉ですが、私には考えることがありますので今回は……」

香山は丁寧に辞退した。その後四方山の話で時間の経つのを忘れるほど、お互いに向うまの合う二人だったが、所詮生きる道が基本的に違うのは、お互いにわかつて

いた。別れ際吉岡が、

「香山さん、こんなこと言っちゃ失礼だが、私は今後、貴方とは私的な兄弟分と考
えますので、何かお困りのことでもあれば、いつでもご相談下さい」

言い置いて、名残惜しそうに香山の住まいをあとにした。

以来、深い付き合いはなかったが、香山が何度辞退しても吉岡は、盆暮れの贈物
を欠かさなかった。香山はそんな吉岡を、裏家業の人間ではあるが、筋の通った義
理堅い男だと、胸の中で尊敬していた。吉岡はやがて、日本を二分する組織の頂点
に立ったが、香山との密やかな交流は現在でも、絶えることなくつづいている。

事情を知らない紀美子は、あの人は何者なのだろうか、香山に畏怖感を抱い
た。その筋の人間には到底思えないが、ただ者でないのは確かである。このままこ
れ以上の人間関係になっていいものだろうか、胸の中をふと危惧のようなものが走
った。

このあと二人は店に寄ったが、ママはすっかり控え目な態度で、紀美子の言うこ
とをしおらしげに聞いていた。

香山は突然発生したトラブルが、無事に済んだのでホッとしていた。店の雰囲気
も表面だけでも知れないが、ますます良い方向に向かっている。紀美子のためにも、
このまま健全な状態になってくれることを祈った。

やがて酔いのまわった香山は、紀美子にせがまれて、『枯れ葉』をカラオケで唄
った。客もホステスたちも原語で唄う、彼の歌唱力に驚いた。終わると客席からの
アンコールで、こんどは『マイウェイ』を、ギターの伴奏で唄った。盛大な拍手で
テーブルに戻った香

山に、紀美子が、お店のショウタイムにしたいわね……、と真面目な表情で呟いた。

香山はこの辺が潮時と思い、紀美子に会計を頼んだが、今日は頂くわけにはいか
ないと言って、もう一軒だけ……、と懇願する紀美子を断り切れず、二人で店を出
た。

近場にある、紀美子の知り合いのスナックに入り、周りを気にする必要がなくな
った二人は、グラスを重ねて相当に酔った。

紀美子は酔いが深まるとともに、香山に抱いていた微かな危惧感が消え、今夜は
どうしても離れたくない気持ちに囚われていた。帰り道、タクシーを掴まえて香山
につづいて乗り込んだ紀美子は、運転手に言って中野の自宅に直行させた。

紀美子の住まいは、マンションの一室だったが、三LDKの部屋は紀美子の人柄
を思わせるような、きちんと整頓された清潔感に溢れ、心地好い芳香を漂わせてい

た。

紀美子に言われてバスルームに入り、一日の垢を落とした香山は、そのあと用意
されたブランディをご馳走になり、ベッドで横になった。シャワーを浴びて寝室に
入って来た紀美子は、当然のように香山の脇に滑りこんできた。

五

純子は、哲夫がときどき夜遅く、札幌の実家に無言電話をかけているのを知って
いた。隣の部屋で寝入っている振りをして聞いていたが、哲夫が独り言を呟いたり、
溜め息をついたりしているのがよく聴こえた。最近では麻雀にも出かけなくなり、『上
海』のマスターや、ノミ屋の吉田から頻繁に電話があった。

昨日、紀美子から連絡があり、明日から一週間の予定で、仙台に展示販売で出か
けると言ってきた。最近起きた、『くろかわ』でのトラブルを片づけた経緯を紀美
子から聞いて、純子は香山に対する胸の痛くなるような思いが、益々昂じるのを抑
えようがなかった。ぐずぐずと煮え切らない態度で、ふてくされたような毎日を送
っている哲夫には、

「札幌に帰りたいなら、独りで帰ってもいいわよ……」

鬱陶しくて堪らなくなり、言い渡した。

「そのかわり、借金の後始末だけはきちんとしていかないと、実家に迷惑をかける
ことになるわよ」

脅しでなく、純子は玉木や吉田の噂を聞いてそう思いこんでいた。

そして、もし香山とつき合えるなら、別に愛人でなくても、ときどき会う飲み友だ
ちでもいい。とにかく二人だけで交際が出来るなら、女独り生活する道はいくらで
もある……、心の中で将来の夢を描いていた。

紀美子は明日から仙台に出張の予定だった。今朝も香山はここから会社に出かけ
ていった。留守中純子と二人だけでは、絶対に会わないでと念を押しておいた。

最近の純子の態度から、ただならぬものを感じていて、香山に向けられる情念
を、女の直感で捕らえていた。純子に香山のことを告げるべきか考えたが、今は
時期が悪いと思っていた。

仙台で商売をはじめてからも、そのことが頭から離れず、夜になるとかならず香
山に電話をして、一日の状況を報告し合いながら探りを入れた。自分にもこんな面

があつたのかと驚くくらい、嫉妬の感情が募っていた。

純子は、紀美子が仙台に出かけた日の午後、香山の会社に電話を入れたが、ちょうど在社していて繋がった。

「今夜、是非お会いしたい」と言うと、

「申しわけないが、今夜は無理なので明日なら」と返事が返ってきた。翌日の夕方七時に、銀座の東京ホテルのロビーで待ち合わせる約束をした。

明日の夜に期待して、入浴のとき牀の隅々まで念入りに磨き、浴室の鏡に牀を写して見た。五十歳に近いとはいえまだ瑞々しくて、子供を産んだことのない牀に自信があつた。顔はともかく、スタイルなら紀美子にはひけを取らないと思つた。

寢床に入ると間もなく、哲夫が鼻を鳴らして潜りこんできた。驚いて押し出すと、

「いいじゃないか、もう半年もご無沙汰だぜ……」

またしがみついて来たので、思いきり蹴飛ばして布団の外に放り出した。哲夫がふてくされて、

「よくわかつた。お前がその気なら、俺は明日札幌に帰る」と言うので、

「どうぞどうぞ」と言つてやった。明日を控えたこの大切な牀……、だれが哲夫なんか……、嫌悪感が先に立つて震える思いだつた。銀座の東京ホテルに、約束の時間より三十分も早く着いてしまった。七時少し前に香山が現れた。

「やあ、お待たせ……」

純子に手をあげて近づいてきた。相変わらず暖かそうな笑顔が印象的だつた。純子は年甲斐もなく、顔が紅潮し胸が高鳴つた。

「どこに行こうか」

香山の言葉に、

「新橋の『申善』は、いかがかしら」

純子を用意していた言葉を出した。『申善』は、以前紀美子と一緒に行ったことがあり、料理も手頃な値段で、なによりも静かな個室で話せる利点があつた。勿論紀美子は常連でなく、そこから噂の出る気遣いはなかつた。

折から中秋の名月で、東京の空としては、珍しいほどすっきりした姿を現している、周囲には星の瞬きも微かに見えていた。

『申善』は、早い時間から混みはじめていたが、幸いなんとか空き部屋がとれた。

切り炬燵風にしつらえた座席に着き、早速日本酒を注文した。

この店推奨の灘の名酒で、最近お爛した酒にご無沙汰の純子には、殊の外美味しく感じられた。香山も満足そうな表情で盃を口に運んでいた。

「今夜のこと、黒川さんには内緒でいいのね」

純子が言うと、

「余分な気遣いをさせないで済むから、そうしよう」

香山も同調してくれた。

純子は、今夜は酔い過ぎないようにと、酒をセーブしていた。

「おや、どうしたの？ いつもと違うね、ピッチが遅いじゃない」

香山が銚子をあげて、純子の盃に注いだ。

この人は、二人だけでこうしていても、何も感じないのかしら……、純子は表情も態度もいつもと変わらない香山が、じれつたかつた。

飲みながら純子は、自分の生い立ちや哲夫のことを、問はず語りに話しはじめた。

香山は黙つて聞きながら、盃を口にしていたが、神楽坂の『上海』の連中に、哲夫が馬を奪られ借金を背負わされた話になると、目を光らせた。

そして哲夫が札幌に帰りたくても、借金が足枷になっていて、身動きができないでいると言うと、

「もしかすると、その借金、帳消しにすることができるとも知れない。当てにしないで待つてみて下さい。それにしても佐川さん、人が良すぎますね」

驚いたように、純子の目を見つめた。

香山は以前、神楽坂の『山ふさ』で顔を合わせたことのある、哲夫を思い出していたが、玉木が筋者だつたとは、人は見かけによらないものだと考えた。

「そんなことができるなら、夢のようなお話ですけど、いずれにしても佐川は札幌に返して、私は東京に残るつもりなんです」

純子が言うのに、

「佐川さんとは、もうあと戻りできないんですか？」

痛ましそうな目で、純子を見た。

「もう無理だわ、半年前から別れるつもりでいたの」

純子の気持ちは、固まっているようだった。純子の話が一段落した様子なので、

「出ましようか？」

香山の言葉に純子は頷き、お手洗いにと言つて立ち上がり勘定場に行った。部屋に戻つた純子に、気配を察した香山が、

「会計は幾らでした？」

聞きながら財布を出した。

「駄目よこは、誘ったのは私だから」

どうしても受け取らないと言う純子に、

「じゃあ、もう一軒寄りませうか」

香山が言つて『申善』をあとにした。

新橋では、烏森口に香山の知っているスナックがあった。二十人も入れれば満員になるような小さな店だったが、夫婦で切り盛りしている家庭的な、暖かみのある店だった。飲むにしても唄うにしても、気兼ねのない客層で、香山は昔からの馴染みだった。

こういう店では、男女の二人連れであれば、よほどのことがない限り、愛人同士として扱う。純子はすっかりそのムードに乗った。香山と腕を組んでのデュエットや、グラスを交換しての飲み比べなどで、セイブしていたタガがはずれたらしく、すっかり酔い、妖艶な雰囲気を見放していた。

昔からこんな状況になって、純子の思い通りにならなかった男はいない。マスターやママの見えていないところで、酔いに任せて香山の唇に口づけをしたが、香山は避けるでもなく悠然としていた。純子はじれったかったが、楽しみはあとで我慢した。その分また酔った。

六

香山は純子が哀れだった。気の弱い男と暮らし、一人で悩みを背負い込んだような美しい女が、自分に好意を抱いてくれるのは、男として嬉しくない筈がなかったが、紀美子の存在があった。

もし紀美子のことがなかったら、女日照りがつづいていた最近、危ないところだった。純子の気持ちはよくわかるが、香山の性格として絶対に二股は考えなかった。今夜は思いきり鬱積したものを、吐き出させてやって、純子がこれからの人生計画を見誤らないよう、手助けするつもりになっていた。

そして神楽坂の周辺は、確か吉岡総長の傘下の組が支配している筈で、いつか彼に呼ばれ二人だけで銀座で飲んだとき、神楽坂での麻雀の話をしたら、

「神楽坂界限で、悪戯する奴がいたら、いつでも遠慮なく連絡してよ、あの辺は俺

の手の届く場所だから」

冗談めいて言っていたのを思い出した。

閉店の一時になると、純子は相当酔っていて、タクシーで神楽坂に向かうと、

「今夜は家に帰りたくない……」

駄々をこねはじめた。どうしてもホテルに泊まると言い張り、タクシーの運転手も、

「どうしましよつか？」

香山に訊るので、とりあえず一応四ツ谷のホテルに車を着けさせた。タクシーに純子を待たせて、まだ起きていたフロントに訊くと、部屋はあるとのことなので、タクシー代を支払って純子を降ろし、部屋まで肩を貸して運んだ。

部屋に入ると、いきなり純子がむしゃぶりついてきて、香山にキスを求めた。香山は逃げなかったが、純子は深いキスをして、香山の舌に自分の舌を絡ませて呻いた。

香山は酔って、わけがわからなくなっているらしい純子を、ベッドに運び、ツーピースの上着とスカートを脱がせて、寝やすいようにした。

純子は寝苦しいのか、毛布を蹴って形の良い白い太腿が、つけ根まで頭になり、白いスキヤンティがむき出しになった。香山は純子の太腿に軽くキスをして毛布をかけた。

安心しているのか、純子は軽やかな寝息を立てはじめた。香山はもう一度純子の額に口づけをして部屋を出た。出入り口のドアは自動的にロックした。

フロントに断って料金を支払い、表に出てタクシーを拾い、早稲田の住まいに戻った。翌朝七時に仙台の紀美子から電話があり、昨夜何度も電話したが留守だったと、心配そうに言うので、

「会社の仕事で遅くなった」

と説明し、安心させた。

今日も社業は順調で、役所への商品納入の入札では、香山の会社は順調に納入契約を進めることが出来た。

夕方になり、吉岡総長が本部に出る時間になったので、電話をすると吉岡が代わった。神楽坂の件について説明すると、

「暫く時間をくれ……」

と言うので、一旦受話器を置いたが、間もなくかかってきた。

「吉田というのは、確かに組織の末端に居る奴だが、そんな稼業の届けもないし、

無断でのシノギなので、直ちに話をつけさせるから、香山さんの友だちに安心するよう言ってくれ……」
とのことだった。

第六章

一

純子が目を覚ますと朝の七時だった。慌てて周りを見回したが、香山の姿はなく一人でいるのに気がついた。夕べ香山と、このホテルに入った漠然とした記憶が残っている。でも一人寝だったことがわかる。

また酔いすぎたのかと、舌打ちしたい思いだった。深夜にこの部屋で香山と、とろけそうなキスをして、ベッドに寝かされた迄は朧な記憶があるのだが、そのあとの記憶がはつきりしない。

香山と寝たのなら、躰が覚えている筈だがその感触もなく、彼がどんな状態で帰ったのか知る由もなかった。ただあんな状況の中で、男と女の進展がないとは信じられなかった。もしかすると香山は、男としての機能が、欠けているのかも知れないと思っただ。

二日酔いで頭がずきずきしたが、シャワーを浴びて身支度を整え、フロントに寄ると、香山は明け方、純子を部屋まで送りこんだあと、間もなくして会計を済ませて帰ったらしい。

住まいに戻ると八時を回っていたが、哲夫はまだ寢床の中にいた。声をかけたが返事もなかった。純子は一応食事の支度をして、ダイニングのテーブルに並べて置き、自分は食欲もないので、畳の上に枕だけ出して寝転んだ。

翌日の昼下がりに電話が鳴ると、隣の部屋から哲夫が、
「俺だったら、いないって言ってくれ……」

切羽つまった声で言った。純子が受話器をあげると吉田からで、哲夫は不在だと
言うと、

「じゃあ、奥さんから伝えてくれ。これまでの麻雀と競馬の貸し金、棒引きにするから、もう近寄らないでくれってな」

大分慌てた声だった。純子はその電話を聴いて、やはり香山が動いてくれたのだと直感した。それにしてもなんとという素早い、手の打ちようなんだろうと、紀美子から聞いた以上に香山に対して畏怖感を抱き、香山との甘い妄想が消えた。

あの人は、私の手の届かないところにいる人だ……。そう思った途端に、何も彼も捨てて母親のところに戻りたくなった。布団を被っている哲夫を起こして、

「もう借金のことは解決したから、心配する必要はなくなったわよ。貴方とは別れるつもりだけど、出てきたのは一緒なんだから、せめて帰るのも札幌まで一緒に行きましょう」

ふてくされていた哲夫が、飛び上がるようにして驚き、信じられないような目をした。

「なんで、そんなことになったんだ？」

「黒川さんに頼んで、大物に動いて貰ったのよ、貴方はこのままだったら、殺されるどころだったのよ」

純子の言葉に、哲夫は脊を小刻みに震わせた。

「悪かった勘弁してくれ、それでこのあとは、その大物になんかしなけりやならぬのか？」

「さあ、それは黒川さんの胸三寸で決まることよ」

「お、俺は黒川さんは苦手だ、なんとか俺が顔を出さないで済むようにしてくれ」手を合わすようにして、哀れな目を向けた。純子はその姿にツバでも吐きかけた思いをこらえたが、反面哀れみの感情が胸をかすめた。

翌日のうちに家主に話をつけ、道具屋を呼んで家財道具を全部処分したが、札幌まで帰る経費ががやとどだった。夜行の寝台列車で帰る手筈を整え、上野駅まで二人でタクシーを飛ばしたが、途中不忍池のところで一時停車して貰い、一人で車外に出た。

紀美子は、明日東京に戻る予定だと聞いていたが、これまでの厚誼についてのお礼と、黙って姿を消すお詫びを手紙に書いた。香山に宛てては、今回のご処置については心の底から感謝する旨の、長文の手紙を投函しておいた。

香山が住むという、早稲田の方向を見上げると、今夜も東京の夜空は雲もなく、星のきらめきが微かに見えた。

「香山さん紀美子さん、さようなら、お幸せに……」

純子の胸を万感の想いが去来した。こんなに切ない旅立ち、札幌に帰って、あとのくらしい生きられるか知れないけれど、香山さんには一生感謝を捧げます。直接お目にかかってお礼もせず、立ち去ることをお許し下さい……。

見上げる空で大きな星が、純子を哀れむかのように瞬いていた。

仙台での展示販売は、無事終了して売上はまあまあだった。今回の催しは、卸し先の業者に対する、応援の意味を含めた販売だったので、経費さえ出れば充分だった。

最近紀美子は宝石の販売について、以前のような情熱が持てなくなっている。スランプかなとも思ったが、もっと精神的なところに原因がありそうだった。

曾根村との人間関係では、顔を合わせるのさえ鬱陶しさを感じるようになっていた。商売は別と割り切るように努めたが、心の動きを抑えかねていた。

土曜日の夜、八時に上野駅に着き、早速香山と純子に電話をした。香山は直ぐ電話に出た。明日早い時間から近県に出張するというので、月曜日の夕方会うことにしたが、純子の電話は、呼び出し音が鳴っても誰も出なかった。

翌朝の七時と夜の八時にも電話を試してみたが、やはり呼び出し音が、虚しく聴こえるだけだった。何か嫌な予感がして、その夜は純子の夢を見た。香山と純子が手を繋いで逃げるのを、必死になって追いかけている夢で、夜中に目が覚め、悔しく眠れなくなった。月曜日の朝九時に出勤して、出張報告を書き、商品の出納記録を済ませてから、車で神楽坂の純子の住まいに向かった。

到着したのは正午になったが、四階にある部屋の前に立つと、表札が外されていた。一瞬胸が騒ぎ、呼び鈴を押しながらドアのノブを回すと、ドアが簡単に開いた。「純子さーん、いないの？」

部屋の中をうかがったが、ガランとしていて、人間も家財道具も見当たらなかった。思わず靴を脱いで部屋にあがったが、藻抜きの殻だった。愕然として表に出て隣の呼び鈴を押すと、主婦らしい女性が顔を出したので、訊ねると、

「お隣りは三、四日前に、引越された様子ですよ」

別に移転の挨拶もなかったと言った。長い間住んでいたのに隣近所との交流もない、これも大都会の一面だった。その主婦から家主の電話を聞いてかけると、

「ああ、佐川さんなら、全部精算して北海道に帰りましたよ」

別に何かの事件でもなさそうに言った。何があったのか知らないけれど、それはないんじゃないの純子さん……、紀美子は胸の中で呟いた。

以前だったら、シヨックはもっと大きかったろうが、今は香山がいてくれる。そう思うと共に必ず何か連絡がある筈だ、もしかすると純子が言っていた、『上海』や競馬のノミ屋との絡みで夜逃げ……。いやあの純子の性格では、そんなことはあり得ない……。考えが纏まらず、夕方香山と『くるかわ』で会う時間が待ち遠しか

った。

最近は何子もやっと自分独りでは、お店の経営が難しいことがわかってきたみたいだ。これまでの生き方で、相当屈折した感情の持ち主になっている。たった一人の妹のこと、なんとか修復してやりたいと思っていた。

店で飲んでいると、七時半頃になってようやく香山が姿を見せた。逢うまでは言いたいことが、沢山あった気がするが、顔を見た途端に忘れてしまった。

「ご苦労さんでした、大変だったでしょう」

香山が水割りのグラスをあげたので、乾杯した。

「香山さん、純子のこと何か聞いてますか？」

「純子さんが、どうかしましたか？」

「今日、純子の住まいに行ってみたのですが、誰もいなくて藻抜けの殻、驚いて家主さんに聞いたら、荷物を整理して札幌に帰ったみたい。私は東京にいなかったの、貴方に何か連絡がなかったかと思って……」

「いや何も、でもご主人と一緒になら、いいじゃないですか」

「貴方も冷たいわね、純子が心配だわ」

「何かあれば、必ず連絡がありますよ、連絡し難い事情でもあるんじゃないですか？」

そっとしておいてあげましょうよ」

紀美子は、香山が冷たすぎるような感じを受けたが、これ以上詮索してみてもどうにもならないことなので、連絡待ちということになった。二時間くらい飲んで、二人一緒に紀美子の住まいに帰ったが、郵便受けに純子からの手紙が入っていた。

部屋に入るのもどかしく、紀美子が封を切り手紙を読んだ。内容は、『長い間の厚誼に感謝すること、哲夫の借金関係で周囲に迷惑をかけ、ある人の世話で一応決着がついたが、大都会での生活に自信がなくなり、二人で尻尾を巻いて逃げ出します。恥ずかしいので顔を合わせないで出発しますけれど、紀美子さんと香山さんのお幸せを心からお祈りします……』とあった。

この夜紀美子は、

「別々に生活していても、意味のないことなので、ここに移って来て……」

真剣に勧めたが、香山はもう少し先にならんと笑顔で言い、即決はしなかった。

紀美子はどうしても、香山の私生活のすべてを掌握したかった。どうにかして一緒に住もうと心に決めていた。

昭和五十八年四月十五日、東京デイズニーランドが、千葉県浦安市舞浜に開場した。ウォルト・ディズニーがつくりあげた世界を実現した、ファンタジーなテーマパークは、最初から大成功の予感があった。

それは精神生活を否定する、経済至上主義の社会における、息抜きの空間でもあった。この年のゴールデン・ウィークでは、空前の賑わいだっただ。この大型連休に香山と紀美子は、軽井沢に滞在していた。

このところの短い月日に、いろいろな出来事があった。その一つは紀美子が曾根村商會を退職して、独立したことだった。

中野の西口に小さな貴金属店を開業して、どうしても専務と一緒にという女子社員二人と商売をはじめた。曾根村も表面上は快く送り出した。

男子社員の中にも、ついて出たいというのが何人かいたが、独立する店はそんな規模じゃないと言って諦めさせた。

このゴールデン・ウィークは、香山が中野に移り住んで、事実上の夫婦として人生の再出発する記念にと、紀美子が計画して『星野温泉』で過ごすことにした。

初日の早朝、まだ薄霧の立ちこめている中を、二人はこの温泉に隣接する、広大な野鳥の森にわけ入った。

清浄な空気と緑一色の中で、高台に登ると霧が晴れてきて、目の前に浅間山がくつきりと浮かびあがった。紀美子が香山の腕に縋り、「貴方、この景色は一生忘れないわね……」

感激した面持ちで言った。

この記念旅行の最終日、二人は軽井沢駅の近くにある『雲場の池』にも立ち寄った。あまり広い池ではないが、周りにカラマツや白樺、モミジなどの自然林に囲まれた、静寂な環境で、周囲の新緑と空を写して、紺碧の池の面が静まり返っている。

紀美子が水面に小石を投げると、波紋がゆらゆらと広がりを見せ、やがてまた水面は何事もなかったように、渦紋を呑みこんで静まり返った。

有名詩人の言葉じゃないが、時が流れるのじゃない、人が流れるのだ……。実感だった。二人の周辺を、数多くの人々が流れすぎていった。与えられた折角の人生、これからは二人で悔いの残らないように生きたい……。紀美子の願いだっただ。